静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第21集

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳

第二東名No.84地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－5

２０１２

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第21集

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳

第二東名No.84地点

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

藤枝市－5

２０１２

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

第二東名高速道路の建設に伴う調査により、藤枝市域では志太平野北部に所在する多くの遺跡の詳細が明らかになりました。本書はその中で平成15年６月から平成16年１月に本調査が実施された、藤枝市花倉字大柳に所在する花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳の発掘調査報告書です。

花倉大柳遺跡は、葉梨川中流域の志太平野に面した丘陵上に位置しています。調査により、縄文時代から古代にかけての遺構や遺物が発見され、集落域・墓域としての土地利用の変遷を追うことができる興味深い遺跡であることが明らかになりました。縄文時代中期前半の遺構としては、竪穴住居跡や石囲炉が発見され、土器や石器などの遺物が集中して出土しています。この時期は志太地域全体の遺跡数が急増する時期に当たり、花倉地域の丘陵地にも集落が形成された可能性が確認されました。また、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡や方形周溝墓が複数確認され、瀬戸川中流域の白砂ヶ谷遺跡などと同様に、集落域から墓域への継続的な変遷を窺うことができます。さらに、須恵器を伴う円形の周溝が発見され、葉梨川流域では調査例が少ない古墳時代後期前半の古墳の存在を想定することができました。

花倉大柳古墳は、花倉大柳遺跡南側の丘陵上に単独で作られた古墳時代前期後半から中期の円墳です。埋葬施設には割竹形木棺が採用されており、出土遺物は少ないものの、志太平野北部の丘陵上で典型的に見られる古墳の一つとして、注目すべき資料であることが明らかになりました。

本書が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2012年11月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝　田　順　也

例　言

1　本書は、静岡県藤枝市花倉字大柳に所在する花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳（第二東名№84地点）の発掘調査報告書である。

2　現地調査及び整理作業は、第二東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社（旧日本道路公団静岡建設局）の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施し、平成23年度以降は、静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。

3　花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳（第二東名№84地点）の確認調査・本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

確認調査：平成15年２月～４月　調査対象面積10,320㎡

本 調 査：平成15年６月～平成16年１月　調査対象面積4,840㎡

資料整理・報告書作成：平成23年６月～平成24年11月

4　調査体制は、第２章第１節に明記した。

5　本書の執筆は、常勤嘱託員五味奈々子が行った。

6　本書の編集は、静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　現地での基準点測量は株式会社フジヤマ、空中写真撮影および遺構測量の一部は朝日航洋株式会社に委託した。整理作業・保存処理業務は株式会社パソナに委託した。

8　本書の作成にあたっては、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

伊藤通玄、篠原和大、澁谷昌彦、谷藤保彦、戸田哲也、樋口誠司、綿田弘実（五十音順・敬省略）

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。

2　本書で使用した遺構の表記は次のとおりである。

例）SH01（SH：遺構の種別　01：遺跡内の全遺構通し番号）

SH：竪穴住居跡　　SD：溝状遺構　　SK：土坑　　SX：性格不明遺構

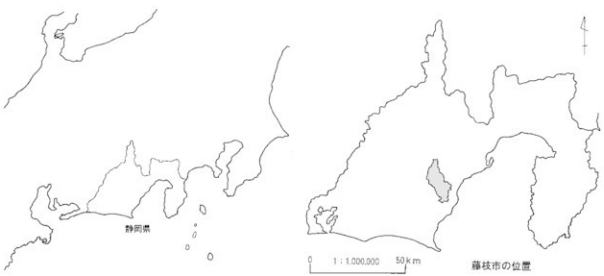
SP：SH外の小穴　　P：SH内の小穴　　K：SH内の土坑

3　遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図版に明記した。

4　遺物番号は、挿図掲載遺物について通し番号を付している。

5　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。

6　本書の図中に用いたスクリーントーンなどの使い分けについては、必要なものを各図の中で表記している。



目　次

序／例言／凡例／目次

第１章　位置と環境 …… 1
第１節　位置と地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境と調査歴 …… 1

第２章　調査の方法と経過 …… 6
第１節　調査の体制 …… 6
第２節　発掘調査の方法と経過 …… 6
第３節　資料整理の方法と経過 …… 9

第３章　調査成果 …… 10
第１節　概　要 …… 10
1　地　形 …… 10
2　土　層 …… 10
3　遺構・遺物の概要 …… 10
第２節　花倉大柳遺跡の調査成果 …… 16
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
2　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物 …… 25
3　古墳時代後期の遺構と遺物 …… 38
4　古代以降の遺構と遺物 …… 42
5　遺構外出土遺物 …… 44
第３節　花倉大柳古墳の調査成果 …… 54
1　墳丘と周溝 …… 54
2　埋葬施設 …… 54
3　出土遺物 …… 58

第４章　まとめ …… 59
第１節　花倉大柳遺跡について …… 59
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 59
2　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物 …… 59
3　古墳時代後期の遺構と遺物 …… 60
4　古代以降の遺構と遺物 …… 60
第２節　花倉大柳古墳について …… 60

写真図版／抄録

挿図目次

第1図 静岡県中部地域の地質概略図 …… 2
第2図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図 …… 5
第3図 確認調査トレンチ配置図 …… 7
第4図 本調査区と周辺地形図 …… 8
花倉大柳遺跡
第5図 東谷部土層断面図 …… 11
第6図 西谷部土層断面図 …… 12
第7図 第1面全体図 …… 13
第8図 第2面全体図 …… 14
第9図 SH71平面図・断面図 …… 15
第10図 SD66平面図・断面図 …… 16
第11図 SK72、SP73平面図・断面図 …… 17
第12図 SK72出土遺物1 …… 18
第13図 SK72出土遺物2 …… 19
第14図 SK51・56・62、
SP57・63平面図・断面図 …… 20
第15図 SX59平面図・断面図 …… 20
第16図 遺構外出土土器1 …… 22
第17図 遺構外出土土器2 …… 23
第18図 SH60平面図 …… 26
第19図 SH60断面図 …… 27
第20図 SH37平面図・断面図 …… 28
第21図 SH01平面図・断面図 …… 29
第22図 SD30・31・50－1・
50－2平面図・断面図 …… 30
第23図 SD26～29平面図・断面図 …… 32
第24図 SD27遺物出土状況 …… 33
第25図 SD27出土遺物 …… 33
第26図 SD03平面図・断面図 …… 34
第27図 SD03出土遺物 …… 34
第28図 SD34～36、SK46平面図・断面図 … 35
第29図 SD36出土遺物 …… 36
第30図 SK04・20・22・23、
SP21平面図・断面図 …… 37
第31図 SK24・25・47平面図・断面図 …… 38
第32図 SD02平面図・断面図 …… 39
第33図 SD02遺物出土状況 …… 40
第34図 SD02出土遺物 …… 40
第35図 SD33、SK41平面図・断面図 …… 41
第36図 SD33出土遺物 …… 42
第37図 SK44、SX45平面図・断面図 …… 43
第38図 SK32平面図・断面図 …… 43
第39図 遺構外出土土器3 …… 44
第40図 遺構外出土石器1 …… 45
第41図 遺構外出土石器2 …… 46
第42図 遺構外出土石器3 …… 47
花倉大柳古墳
第43図 墳丘測量図 …… 55
第44図 主体部掘方完掘状況 …… 56
第45図 主体部木棺完掘状況 …… 57
第46図 古墳出土遺物 …… 58

挿表目次

第1表 周辺遺跡一覧 …… 4
第2表 藤枝地区の調査体制 …… 9
花倉大柳遺跡
第3表 花倉大柳遺跡出土縄文土器一覧 …… 49
第4表 花倉大柳遺跡出土
弥生～中世土器一覧 …… 52
第5表 花倉大柳遺跡出土石器一覧 …… 53
花倉大柳古墳
第6表 花倉大柳古墳出土土器一覧 …… 58

写真図版目次

図版１　遺跡遠景（西より）
　　遺跡遠景（南西より）

花倉大柳遺跡

図版２　第１面全景（東より）
　　第２面全景（東より）
図版３　西谷部全景（南東より）
　　SH71完掘状況（北より）
図版４　SK72第１面検出状況（南東より）
　　SK72第２面検出状況（南東より）
図版５　SH60完掘状況(北西より）
　　SH60炭化物検出状況（南より）
図版６　SH60炉跡検出状況（北より）
　　SH60K1検出状況（北西より）
図版７　SH01検出状況（南より）
　　SD26・27完掘状況（東より）
図版８　SD03完掘状況（東より）
　　SD02完掘状況（南より）
図版９　SD02遺物出土状況（南より）
　　SX45検出状況（南東より）
図版10　SD02・SD33・遺構外出土遺物
図版11　SK72出土遺物
　　遺構外出土土器１
図版12　遺構外出土土器２
　　遺構外出土土器３
図版13　遺構外出土土器４
　　遺構外出土土器５
図版14　SD27出土遺物
　　SD03出土遺物
図版15　SD02出土遺物
　　遺構外出土土器６
図版16　遺構外出土土器７
　　遺構外出土土器８
図版17　遺構外出土石器１
　　遺構外出土石器２
図版18　SD36・遺構外出土石器３
　　遺構外出土石器４

花倉大柳古墳

図版19　古墳全景（北東より）
　　主体部木棺完掘状況（北より）
図版20　主体部掘方完掘状況（北より）
　　木棺北小口裏込め礫出土状況（南より）
図版21　木棺南小口裏込め礫出土状況（北より）
　　古墳出土遺物

第１章　位置と環境

第１節　位置と地理的環境

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳は、志太平野北部を流れる葉梨川の支流である花倉川流域の沖積平野に面した標高約70mの丘陵頂部に所在する。この丘陵は、藤枝市北方の山塊から連なっており、南西側には花倉集落、南東側には下之郷や藪田集落を見下ろし、その先には藤枝・焼津市街、遠くには駿河湾や伊豆半島を望むことができる位置にある。

志太地域の地形は、大きく北部の山岳地、中部の丘陵地、南部の平野に分けられる。北部は赤石山脈の南縁にあたり、高根山（871m）を筆頭に菩提山（691m）、高雄山（675m）など、山岳性の山並みが続く森林地帯であり、南東側に傾斜する山地が続き、丘陵の末端は沖積平野へと没している。南部の平野は、大井川・瀬戸川などによって形成された沖積平野である。

赤石山脈から志太平野にかけての一帯は、フォッサマグナの西端にあたる糸魚川―静岡構造線と中央構造線によって挟まれた形になっており、中央構造線から南東に向かって、古生層からなる秩父帯、中世代白亜紀から古第三紀の四万十累層群からなる四万十帯、古第三紀の瀬戸川層群からなる瀬戸川帯、新第三紀の大井川層群や竜爪層群などからなる新第三系の褶曲帯などが帯状に連なっている。

志太地域北西部は、四万十累層に属する三倉層群の中でも南部に分布する伊久美層群に属しており、この三倉層群の東側には古第三紀の瀬戸川層群がつながっている。瀬戸川層群より南側の平野に面した丘陵は、新第三紀中世の大井川層群に属する。遺跡の所在する丘陵はこの大井川層群に属する平野に面した丘陵のひとつである。

第２節　歴史的環境と調査歴

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳は葉梨川中流域の丘陵上に位置し、第二東名の建設に伴う調査によって新たに縄文時代から古代までの遺構・遺物の存在が確認された遺跡である。本節では志太地域の主な遺跡を時代ごとに概観する。なお、藤枝市内の遺跡名の記載は藤枝市教育委員会1995に準拠している。

旧石器時代

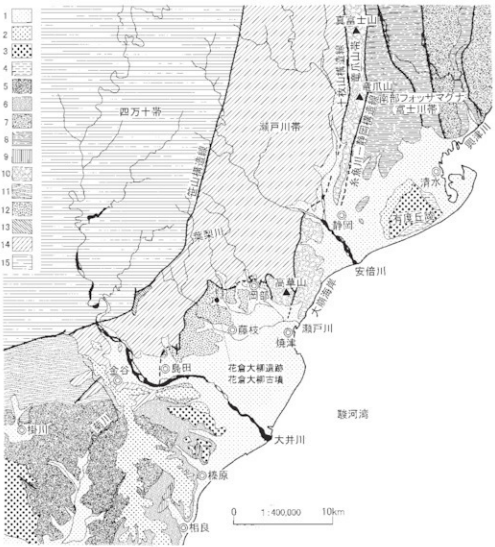
志太地域では明確な旧石器時代の遺跡はほとんど見つかっていないが、瀬戸川下流域右岸の平野に面した独立丘陵上に位置する天ヶ谷遺跡（71）でナイフ形石器や尖頭器、細石刃など少量の旧石器時代の石器が発見されており、旧石器時代の人類の痕跡がわずかに残されている。

縄文時代

志太地域では、縄文時代草創期から早期中頃の遺跡はほとんど見つかっていない。早期後半の土器は、瀬戸川上流域の上ノ山Ⅰ・Ⅱ遺跡（３・４）や中～下流域の荘館山遺跡（46）、滝川遺跡（64）、天ヶ谷遺跡（71）等から出土している。

前期前半の土器は、天ヶ谷遺跡（71）から出土しているのみである。前期末から中期初頭の土器は荘館山遺跡（46）やその東側の丘陵上に位置する若王子遺跡（54）、瀬戸川下流域右岸の丘陵上に位置する滝川遺跡（64）や山廻遺跡（62）、天ヶ谷遺跡（71）からも出土している。

縄文時代中期になると遺跡数が急増する。瀬戸川流域の萩ノ平遺跡（11）・荘館山遺跡（46）・滝川遺跡（64）・天ヶ谷遺跡（71）では中期前半の土器が出土している。中期中頃から後半にかけてはさらに遺跡数が増加し、瀬戸川上流域の上ノ山Ⅱ遺跡（４）や中流域の寺島大谷遺跡（17）、荘館山遺跡（46）、



1 沖積層　2 中位段丘堆積物　3 高位段丘堆積物　4 根古屋累層　5 掛川層群及び曽我層群
6 相良層群 7 清見寺層群及び浜石岳層群 8 静岡層群・和田島層群及び小河内層群　9 女神層
10 高草山層群　11 三笠層群　12 大井川層群　13 相賀層群　14 瀬戸川層群　15 三谷層群

（5万分の1地質図幅　静岡　二葉技術院地質調査所　1982　より引トレース）

第１図　静岡県中部地域の地質概略図

下流域の若王子遺跡（54）、萩ヶ谷遺跡（58）、山廻遺跡（62）、曲山遺跡（63）・天ヶ谷遺跡（71）などで遺物が出土している。寺島大谷遺跡（17）や萩ヶ谷遺跡（58）では中期後半の竪穴住居跡が見つかっており、萩ヶ谷遺跡の住居跡では石囲炉も検出されている。また、荘館山遺跡（46）では古墳墳丘盛土の下から石囲炉が検出されており、中期後半の竪穴住居の存在が想定されている。

縄文時代後期から晩期になると遺跡数は激減し、瀬戸川中流域の萩間遺跡（８）や萩ノ平遺跡（11）などで土器が出土するのみであり、萩ノ平遺跡以外は遺跡の規模も小さい。

弥生時代

弥生時代中期初頭には、瀬戸川流域の丘陵上を中心に複数の遺跡が形成されており、瀬戸川中流域の萩間遺跡（８）、萩ノ平遺跡（11）、蛭ヶ谷遺跡（44）のほかに、荘館山遺跡（46）、萩ヶ谷遺跡（58）、

滝川遺跡（64）、天ヶ谷遺跡（71）など下流域の平野に面した丘陵上にも広がる。これらの遺跡はいずれも住居跡を伴わない小規模で分散的な遺跡であり、大型の打製石斧が出土していることから、これを耕作具として初現的な農耕が行われていた可能性が高い。

弥生時代中期中葉から中期後半には、中期初頭に展開した丘陵上の遺跡の多くが姿を消し、これに替わって葉梨川下流域の上藪田川の丁遺跡（32）、瀬戸川下流域の郡遺跡（40）などで低地部の集落が形成されるようになる。これらの遺跡では水田跡は検出されていないが、緩い傾斜地が広がり、湧水や小流などの水源を利用しやすい立地である点から、水稲耕作を営んだ可能性が考えられる。

弥生時代後期になると、上藪田川の丁遺跡（32）等の居住域が衰退し、さらに低地部に位置する上藪田モミダ遺跡（36）などで集落が形成されるようになる。一方、後期後半には、瀬戸川下流域の白砂ヶ谷遺跡（42）、荘館山遺跡（46）、稲ヶ谷遺跡（56）、滝川遺跡（64）、萩ヶ谷遺跡（58）、瀬戸川中流域の寺島大谷遺跡（17）、蛭ヶ谷遺跡（44）、葉梨川中流域の鳥内遺跡（33）や東浦遺跡（34）など、低地縁辺の丘陵上で分散的な集落が形成される。中でも白砂ヶ谷遺跡は弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて丘陵上に展開した大規模な集落遺跡であり、120基におよぶ竪穴住居跡や方形周溝墓群を検出している。

古墳時代

瀬戸川下流域の白砂ヶ谷遺跡（42）・稲ヶ谷遺跡（56）や葉梨川中流域の中ノ合遺跡（15）など、弥生時代後期後半に丘陵上に形成された集落は、古墳時代前期まで継続していた可能性が高いが、その内容は不明なものが多い。前期から中期には、朝比奈川下流域の宮塚遺跡（28）や葉梨川中～下流域の上藪田川の丁遺跡（32）、鳥内遺跡（33）、東浦遺跡（34）、下藪田遺跡（35）、上藪田モミダ遺跡（36）、水守遺跡（37）、郡遺跡（40）など、集落の多くが丘陵縁辺の平野部や沖積微高地上に点在している。

古墳時代前期初頭には白砂ヶ谷遺跡（42）などで弥生時代の系譜を引く方形周溝墓群が築かれるが、次第に小型の首長墓が築かれるようになる。前期から中期にかけては、葉梨川中流域の寺家山古墳群（13）、衣原古墳群（14）、岩下古墳群（18）、女池ヶ谷古墳群（29）、東浦古墳群（34）、時ヶ谷五鬼免古墳群（52）、瀬戸川下流域の釣瓶落古墳群（53）、若王子古墳群（54）、秋合古墳群（60）など、平野縁辺の小河川流域などに群集する中型・小型墳が営まれ、瀬戸川右岸の丘陵地には大型の円墳である五州岳古墳（55）も築かれている。これらの古墳の埋葬施設の多くは木棺直葬である。

古墳時代後期前半になると、朝比奈川中流域の高田観音前２号墳（22）、瀬戸川中流域の荘館山１号墳・２号墳（46）の３基の前方後円墳が相次いで構築され、荘館山１号墳・２号墳、釣瓶落７号墳（53）などで横穴式石室が採用されるようになる。特に、栃山川左岸にあたる丘陵末端部に点在している小独立丘陵上は、岩田山古墳群（68）、瀬戸古墳群（70）など、後期群集墳が濃密に分布する地域を形成している。

古墳時代に須恵器を生産する須恵器窯としては、葉梨川右岸の丘陵斜面に位置する衣原古窯群（14）、朝比奈川右岸の丘陵斜面に位置する入野高岸古窯群（21）がある。

奈良・平安時代

古代の志太地域には志太郡・益頭郡の二つの郡が置かれていた。瀬戸川西岸の御子ヶ谷遺跡（59）は志太郡衙の一部に比定されており、志太郡の厨家や館と推定できる掘立柱建物跡が検出され、墨書土器や木簡などが出土している。御子ヶ谷遺跡の東側に位置する秋合遺跡（61）でも掘立柱建物跡が検出されており、墨書土器が出土していることから、郡衙に関連した施設が存在した可能性が想定される。また、御子ヶ谷遺跡の南に位置する山廻遺跡（62）では、竪穴住居跡と小規模な掘立柱建物跡が見つかり、分銅や鞴羽口、鉄滓が出土している点から、鍛冶工房であった可能性が考えられる。

一方、瀬戸川と葉梨川にはさまれた沖積微高地に位置する郡遺跡（40）は益頭郡衙に比定されており、

古代の掘立柱建物跡、溝状遺構、柱穴などが検出され、墨書土器、刻書土器、木簡などの文字資料や、土製模造品・木製祭祀具などの祭祀遺物が出土している。また、水守遺跡（37）では重複する複数の竪穴住居や掘立柱建物からなる大集落が形成され、墨書土器、木簡、円面硯など官衙とのかかわりを示す遺物が出土しており、平島遺跡（38）を含めた大規模な施設の広がりが考えられる。

このほか、東浦遺跡（34）・蛭ヶ谷遺跡（44）では、低丘陵上で竪穴住居跡が検出されており、下藪田遺跡（35）や上藪田モミダ遺跡（36）では古代の水田遺構が検出され、畦畔の一部と見られる杭列が発見されている。

８世紀には古墳時代の横穴式石室での追葬が継続する一方で、三ツ池古墳群（31）、白砂ヶ谷古墳群（42）、内瀬戸火葬墓群（65）、萩ヶ谷B古墳群（67）などで横穴式石室の系譜を引く小型の石室が新たに築造される。石室内から火葬骨や蔵骨器が出土しており、初期の火葬墓と考えられている。

古代の窯業遺跡としては瀬戸川中流域の助宗古窯群（16）が知られており、８世紀から12世紀頃まで須恵器・灰釉陶器・山茶碗を生産している。また、瀬戸川下流域右岸の滝ヶ谷古窯（66）では、８世紀前半のごく短期間に生産が行われていたと考えられる。

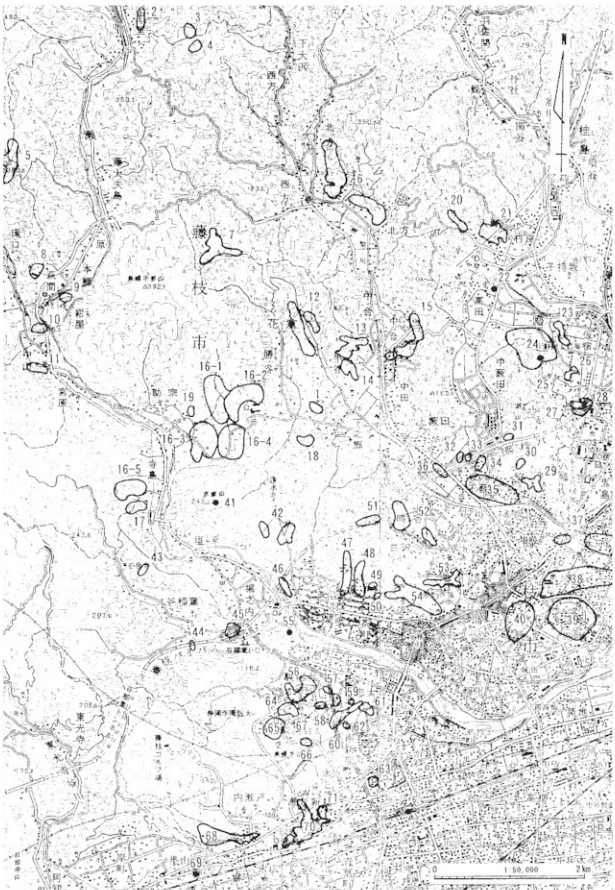
鎌倉時代以降

志太地域で中世の遺跡が発掘された例は非常に少ない。丘陵端部からやや離れた沖積地の微高地上に立地している田中城（39）は、今川氏の時代に整備された志太地域の重要拠点とされる平城である。潮城（27）では丘陵頂部の平坦面で礎石が検出されたが、出土遺物等から近世の遺構である可能性が高いと考えられている。また、花倉城（７）も古くから今川氏の城として知られているが、戦国時代末期に改修された可能性が指摘されている。このほか、瀬戸谷城（５）、朝日山城（24）については本格的な発掘調査が行われておらず、不明な部分が多い。

中世の墓としては、鳥内遺跡（33）や白砂ヶ谷遺跡（42）の丘陵上で集石墓や土坑墓が発見されているほか、蛭ヶ谷遺跡（44）、谷稲葉遺跡（45）、山廻遺跡（62）では、丘陵斜面で火葬墓、集石墓等が発見されている。

第１表　周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	種別
1	花倉大柳遺跡	縄文(中)、弥生、古墳	集・墓
	花倉大柳古墳	古墳(前～中)	古墳
2	内田戸遺跡	縄文(中)	散布地
3	上ノ山Ⅰ遺跡	縄文(早・中)	散布地
4	上ノ山Ⅱ遺跡	縄文(後)	散布地
5	瀬戸谷城	中世	城館
6	北方古墳群	古墳(後)	古墳
7	花倉城	中世	城館
8	萩間遺跡	縄文(後)	散布地
9	寺畑遺跡	縄文(中・晩)	散布地
10	中山遺跡	縄文(晩)	散布地
11	萩ノ平遺跡	縄文(後・晩)、弥生	散布地
12	上平谷古墳群	古墳(末)	古墳
13	寺家山古墳群	古墳(後)	古墳
14	衣原遺跡	弥生～近世	集・墓
	衣原古墳群	古墳(後)	古墳
	衣原古窯跡	古墳(後)～近世	古墳
15	中ノ合遺跡	古墳(前)、中世	集落
16	助宗古窯跡	古代(奈良・平安)	古窯
16-1	(鹿嶋神地区)		
16-2	(花倉地区)		
16-3	(樋谷地区)		
16-4	(清水下地区)		
16-5	(寺島地区)		
17	寺島大谷遺跡	縄文～古墳	集・墓
	寺島大谷古墳	古墳(前)	古墳
18	岩下古墳群	古墳(前)	古墳
19	助宗古墳群	古墳(後)	古墳
20	入野西古墳群	古墳	古墳
21	入野東古墳群	古墳(後)	古墳
	入野高岸古窯跡	古墳(後)	古窯
22	高田観音前古墳群	古墳(中・後)	古墳
23	仮宿山崎古墳群	古墳(後)	古墳
24	朝日山城	中世	城館
25	瓜ノ坪古墳群	古墳	古墳
26	大島古墳群	古墳(末)	古墳
27	潮城	中世	城館
28	宮塚遺跡	弥生、古墳、古代	散・集
29	女池ヶ谷古墳群	古墳(中・後)	古墳
30	下藪田大谷古墳群	古墳(後)	古墳
31	三ツ池遺跡	縄文(中)	散布地
	三ツ池古墳群	古墳(後)	古墳
32	上藪田川の下遺跡	弥生(中・後)、古墳	集落
33	鳥内遺跡	中世、古墳～近世	集・墓
34	東浦遺跡	縄文、弥生、古代～近世	散・集
	東浦古墳群	古墳(前～中)	古墳
35	下藪田遺跡	弥生、古墳、古代	集落
36	上藪田モミダ遺跡	弥生、古墳、古代	集落
37	水守遺跡	古墳(中)～近世	集落
38	平島遺跡	弥生、古墳、古代	集落
39	田中城	中世、古墳	城館
40	郡遺跡	弥生～中世	集落
41	経塚山経塚	中世	経塚
42	白砂ヶ谷遺跡	弥生(後)、古代～近世	集落
	白砂ヶ谷古墳群	古墳	古墳
43	屋敷山遺跡	古代	宅地
44	蛭ヶ谷遺跡	弥生(後)、古代	集落
45	谷稲葉遺跡	弥生・近世	墓
46	谷稲葉高岸古墳群	古墳(中・後)	古墳
	荏簡山遺跡	縄文、弥生	散・集
	荏簡山古墳群	古墳	古墳
47	越ヶ谷古墳群	古墳(後)	古墳
48	笛山古墳群	古墳(後)	古墳
49	正勝古墳群	古墳(後)	古墳
50	東正勝古墳群	古墳(後)	古墳
51	時ヶ谷山ノ神古墳群	古墳(後)	古墳
52	時ヶ谷五反久古墳群	古墳	古墳
53	釣瓶落古墳群	古墳	古墳
54	若王子遺跡	縄文(中)、弥生(後)	散・集
	若王子古墳群	古墳(前～後)	古墳
55	五州谷古墳	古墳(中)	古墳
56	稲ヶ谷遺跡	縄文(中)、弥生、古代	散・集
57	萩ヶ谷A古墳群	古墳(後)	古墳
58	萩ヶ谷遺跡	縄文(中)、弥生(後)	散・集
59	御子ヶ谷遺跡	古代	官衙
60	秋合古墳群	古墳	古墳
61	秋合遺跡	弥生、古代、中世、近世	官衙
62	山廻遺跡	縄文(中)、古代、近世	散・集
63	曲山遺跡	縄文(中)	散布地
64	滝川遺跡	縄文、弥生	散・集
65	内瀬戸火葬墓群	古墳(末)、古代	火葬墓
66	滝ヶ谷古窯	古代	古窯
67	萩ヶ谷B古墳群	古墳(末)	古墳
68	岩出山古墳群	古墳(中・後)	古墳
69	上青島～里塚	近世	一里塚
70	瀬戸古墳群	古墳(後)	古墳
71	天ヶ谷遺跡	旧石器、縄文(早・晩)	散布地



第２図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

第２章　調査の方法と経過

第１節　調査の体制

㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所では、第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査にあたり、日本道路公団静岡建設局各工事事務所の管轄に合わせ、工区を設定し調査にあたることとした。静岡工区（静岡市・藤枝市・島田市）のうち藤枝地区の調査は藤枝市内に設置した藤枝地区事務所を拠点として、それぞれ現地調査を実施した。

本書で取り扱うNo.84地点花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳の調査は第２表にある体制で実施した。なお、第二東名建設事業に伴う全体の経緯及び藤枝地区全体の体制については、『衣原古墳群　衣原遺跡　衣原古窯群』発掘調査報告書に記されたとおりである（静岡県埋蔵文化財調査研究所2010）。

第２節　発掘調査の方法と経過

１　確認調査

確認調査は平成15年２月５日から４月28日まで実施しており、調査対象面積は10,320㎡、実掘面積は790㎡である。調査地内に幅１ｍのトレンチを計30本設定し（第３図）、重機による表土除去及び人力による掘削を実施した。

平成14年度（平成15年２月５日～３月20日）には、１～18トレンチの調査を実施した。このうち、調査区東側の谷部（２・３・６・７トレンチ）で溝状遺構・小穴等を検出し、１～３トレンチ及び５～８トレンチで縄文土器、石器、土師器、須恵器、灰釉陶器が出土した。また、調査区北西端（８・13トレンチ）では炭窯跡と思われる土坑を確認した。南西側尾根（14～18トレンチ）については遺構・遺物は確認されなかった。

つづいて平成15年度（平成15年４月４日～４月28日）は、19～30トレンチの調査を実施した。調査区中央部の瘤状の高まり部分に設定した２本のトレンチ（19・20トレンチ）の交点付近で幅約２ｍの遺構を検出し、同時に７トレンチ南西端を19・20トレンチに向かって延長させたトレンチ内からも複数の土師器片が出土したことから、ここに古墳時代前期～中期頃の古墳が存在していることが推定された。さらに、調査区西側の谷部に27・28トレンチを設定し、２～４、８トレンチを谷部方向に延長させて調べたところ、東谷部とほぼ同様の土層の堆積が確認された。遺物は27トレンチから石器、縄文土器、灰釉陶器が出土した。なお、調査区南東側尾根（21～24トレンチ）では、23トレンチから須恵器片が１点出土したものの関連遺構の発見には至らず、南西側尾根（25、26、29、30トレンチ）についても遺構・遺物は確認されなかった。

以上のように、確認調査の結果、調査区北側については縄文時代～古墳時代の集落跡である可能性が明らかとなり、そのうち東西２箇所の埋没谷部分については遺構面が２面存在することが確認され、本調査を実施することとなった。一方、調査区の南方向に突き出した２つの尾根部分に関しては、明確な遺構・遺物の確認に至らなかったため、本調査の必要はないと判断した。

２　本調査

本調査は平成15年６月11日から平成16年１月16日まで実施しており、調査面積は4,840㎡である（第４図）。本調査に伴い、調査区全体に国土座標に乗った10ｍメッシュのグリッドを設定しており、南北方向

第３図　確認調査トレンチ配置図

第４図　本調査区と周辺地形図

に南からA～G、東西方向に西から１～12としている（第７・８図）。

まず、６月から７月にかけて重機による表土除去を行った後、人力による東谷部第１面の遺構検出を実施し、同時に古墳の表土除去及び墳丘裾の検出を行った。また、８月からは中央丘陵部及び西谷部の遺構検出及び古墳主体部の掘削を実施し、９月から東谷部第１面の遺構掘削及び西谷部の包含層掘削を実施した。その後、10月まで古墳主体部の木棺埋土の掘削及び墳丘裾の精査を行った。同時に、９月から10月にかけて、第１面東谷部及び中央丘陵部の遺構掘り下げを行い、古墳木棺の精査・平面図作成・写真撮影及び東谷部の遺構平面図作成・写真撮影を実施した。10月21日に空中写真測量を実施し、第１面の調査を終了した。

10月後半からは重機による東谷部・西谷部の中間層除去を行い、第２面の包含層掘削・遺構検出を実施し、11月から遺構掘削を開始した。12月から１月にかけて土層断面図・遺構平面図作成、空中写真撮影・空中写真測量を行い、１月16日までに全ての調査を終了した。

調査記録は遺構個別図については手書きで１／10～１／50縮尺の図を作成し、遺構全体図については空中写真測量を行った。写真撮影は、35㎜判カラーネガ、６×７判モノクロネガ・カラーリバーサル、４×５判モノクロネガ・カラーリバーサルフィルムを使用した。

第３節　資料整理の方法と経過

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査については現地調査を優先するという方針から、資料整理・報告書作成は現地調査が終了した段階で実施することとなった。そこで、これに先行する基礎的整理作業の一部（遺物洗浄・注記・写真整理・図面整理）を現地作業と並行して実施し、本格的な整理作業と報告書の作成に備えた。

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳の資料整理は、平成23年６月から静岡県埋蔵文化財センター中原事務所で実施した。出土品については分類・仕分け、接合、復原作業を経て実測、版組、トレース、観察表作成、遺物写真撮影を実施した。遺構図については版組・トレースを実施し、これらを編集して報告書を作成した。なお、遺物の写真撮影は６×７判カラーリバーサル・モノクロフィルムを用いて、当センター写真室で撮影を行った。

第２表　藤枝地区の調査体制

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所			平成14年度	平成15年度
	所長兼副理事長		斎藤　忠	斎藤　忠
	副所長兼理事		飯田英夫	飯田英夫
	総務部	総務部長兼常務理事	粂田徳幸	粂田徳幸
		次長兼総務課長	—	鎌田英巳
		総務課長	本杉昭一	
		経理専門員	稲葉保幸	稲葉保幸
		総務係長	山本広子	山本広子
		会計係長	大橋　薫	野島尚紀
	調査研究部	調査研究部長	山本昇平	山本昇平
		次長兼資料課長	栗野克巳	栗野克巳
		保存処理室長	西尾太加二	西尾太加二
		担当課長	篠原修二	中嶋郁夫
		調査研究員	横山智之	大林　元 小木　充 長谷川　睦 山本剛史
		常勤嘱託員	—	早瀬　實

静岡県埋蔵文化財センター			平成23年度	平成24年度
	所長		勝田順也	勝田順也
	—		—	—
	総務課	次長兼総務課長	八木利眞	八木利眞
		主幹兼事業係長	村松弘文	前田雅人
		総務係長	瀧　みやこ	瀧　みやこ
	—		—	—
	調査課	調査課長	中鉢賢治	中鉢賢治
		—	—	—
		—	—	—
		担当係長	富樫孝志	富樫孝志
		主査	中川律子	中川律子
		常勤嘱託員	五味奈々子	五味奈々子

第３章　調査成果

第１節　概　要

１　地形

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳は、葉梨川支流の花倉川左岸に所在する標高約70ｍの丘陵頂部から斜面にかけて位置する。この丘陵の頂部は東西２つの浅い谷状地形（東谷部、西谷部）を擁するやや起伏に富んだ地形となっており、中央部と北西側に瘤状の高まりが２箇所存在し、東側には平坦な地形が広がっている。２箇所の埋没谷に挟まれた頂部は平坦である。丘陵先端は南北両方向へ断続的に崩落を繰り返した痕跡が見られることから、本来は現況よりも広い台地状を呈していたと推測される。

調査前には茶畑として利用されていたが、開墾等による大幅な地形の改変を受けた様子は見られず、本来の地形を残していたと見られる。

２　土層（第５・６図）

調査区は丘陵部のため、場所により層位の違いが観察された。東谷部・西谷部共に元来は深い谷が形成されており、これらの谷の底部から次第に平坦面を形成するように堆積が繰り返されている。

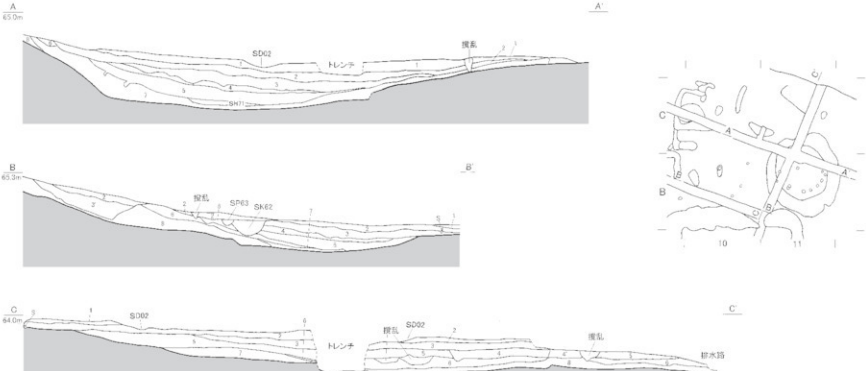
東谷部については、確認調査時には上から順にⅠ層（耕作土）、Ⅱ層（褐色土）、Ⅲ層（黒褐色粘土）、Ⅳ－１層（褐色土）、Ⅳ－２層（にぶい黄褐色土・暗褐色土混土）、Ⅳ－３層（にぶい黄褐色粘土）、Ⅴ層（黒褐色粘土）、Ⅵ層（暗褐色粘土）、Ⅶ層（黒褐色粘土）、Ⅷ層（暗褐色粘土）の堆積が確認され、本調査時にもこの基本土層を踏襲している。第５図Ａ－Ａ'断面１・２層、Ｂ－Ｂ'断面２層、Ｃ－Ｃ'断面２・３層がⅣ－１層、Ａ－Ａ'断面３層、Ｂ－Ｂ'断面３層、Ｃ－Ｃ'断面４・５層がⅣ－２層、Ａ－Ａ'断面４層、Ｂ－Ｂ'断面４層、Ｃ－Ｃ'断面６層がⅣ－３層、Ａ－Ａ'断面・Ｂ－Ｂ'断面５層がⅤ層に相当する。本調査では、Ⅲ層が弥生～古墳時代の遺物包含層、Ⅳ層～Ⅴ層が縄文時代の遺物包含層と判断し、Ⅲ層下面を第１遺構検出面、Ⅴ層下面を第２遺構検出面として扱った。

西谷部では、確認調査時には上から順に１層（耕作土）、２層（にぶい黄褐色土）、３層（黒褐色粘土）、４層（暗褐色土）、５層（暗褐色粘土）、６層（褐色粘土）、７層（黒褐色粘土）、８層（暗褐色粘土）の堆積が確認された。第６図１層が確認調査の４層、２層が確認調査の５層、３層～４層が確認調査の６層、７層が確認調査の７層に相当する。本調査では、東谷部の第１遺構面に相当する遺構面は西谷部では検出されず、東谷部の第２遺構面に相当する面を第６図７層・９層下面で検出しており、縄文時代の遺物は第６図１～７層で出土している。

３　遺構・遺物の概要

調査区では２面で遺構を検出している。このうち、第１面（第７図）では東谷部で古墳時代前期に属すると思われる隅丸方形～方形の竪穴住居跡２棟（SH01・SH37）を検出している。また、中央丘陵部東斜面では弥生時代後期～古墳時代前期に属すると考えられる複数の重なり合う溝状遺構が確認された。これらの溝状遺構は、少なくとも２棟の竪穴住居（SD30・50－2、SD31）と２基の小型方形周溝墓（SD26・28・29、SD27）を構成しており、遺構の切り合いからは、方形周溝墓が竪穴住居より後に構築されていると考えられる。また、東谷部南端では大型の方形周溝墓（SD03）が検出されており、中央丘陵部東斜面の方形周溝墓（SD27）とほぼ同時期に属すると考えられる。

中央丘陵部南側では、木棺直葬の円墳１基（花倉大柳古墳）を検出している。木棺内から遺物は出土



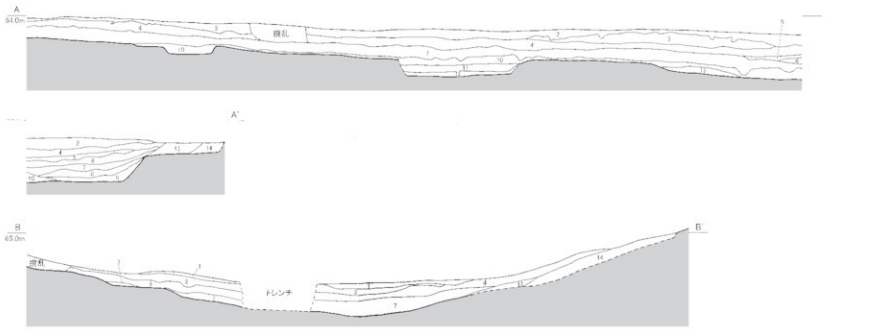
A-A'
1 粘質シルト＋砂粒化した地山礫（10YR3/4～4/6）
2 粘質シルト＋砂粒化した地山礫（10YR3/3～3/4）
3 粘質シルト（10YR2/2～2/3）
4 粘質シルト（7.5YR3/4）
5 粘質シルト（7.5YR2/3）
6 粘質シルト（10YR3/4）
7 粘質シルト（10YR5/6～6/6）
8 地山岩盤

B-B'
1 粘質シルト（10YR4/3）
2 粘質シルト（10YR3/4）
3 粘質シルト（10YR2/3）
3' 地山礫を多く含む（10YR3/3～2/3）
4 粘質シルト（7.5YR3/3～3/4）
5 粘質シルト（7.5YR3/2～2/2）
6 粘質シルト（10YR3/3）
7 粘質シルト（10YR3/3）
8 地山岩盤

C-C'
1 粘質シルト（10YR4/3～4/4）
2 粘質シルト（10YR3/4）
3 粘質シルト（10YR3/3）
4 粘質シルト（10YR2/2）
4' 粘質シルト（10YR2/3～2/2）
5 粘質シルト（10YR3/2）
6 粘質シルト（7.5YR3/4）
7 粘質シルト（10YR3/4）
8 粘土（10YR5/6～6/6）

0　1:100　5m

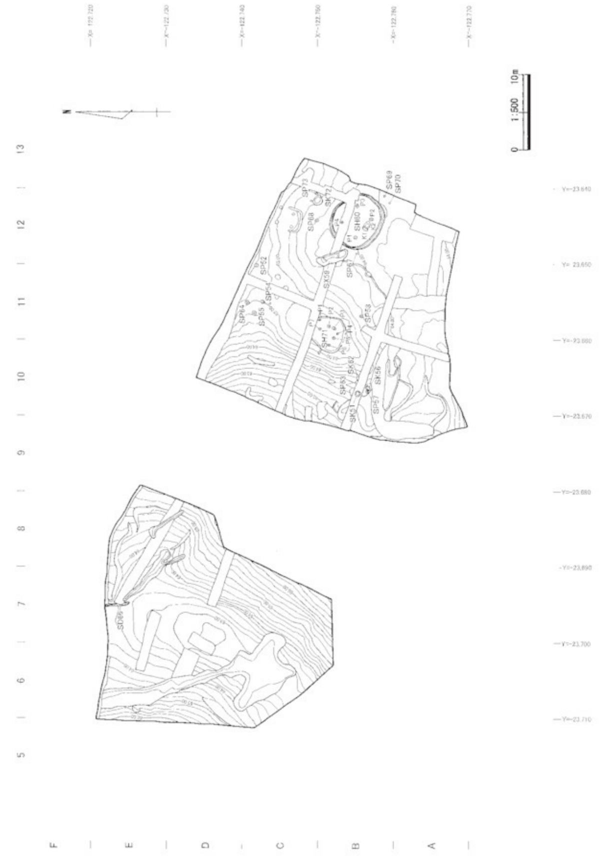
第5図　東谷部土層断面図



第6図 西谷遺跡土層断面図

1 粘質シルト（10YR6/3）
2 粘質シルト（10YR3/2）
3 粘質シルト（10YR4/4）
4 粘質シルト（10YR5/4）
5 粘質シルト（10YR3/4）
6 粘質シルト＋地山由来の白・褐色砂粒少々
7 粘質シルト（7.5YR2/2）
8 粘質シルト＋地山由来？の白色砂粒少々
9 粘質シルト＋地山由来の白・褐色砂粒若干
10 粘質シルト（7.5YR3/3）
11 粘質シルト（7.5YR3/2）
12 粘質シルト（10YR3/3～3/4）
13 粘質シルト（10YR4/6）
14 地山岩盤

第7図　第1面全体図


1:500
10m
SH60
SH71
SD66
SK56
SK62
SK72
SX59
SP52
SP53
SP54
SP55
SP57
SP58
SP64
SP68
SP69
SP70
SP73

第８図　第２面全体図

第９図　SH71平面図・断面図

しておらず、木棺裏込め土上層および墳丘周溝内より土師器片が出土している。また、東谷部中央では古墳時代後期の円形周溝（SD02）を検出している。溝の底部から須恵器蓋坏が３個体出土しており、円墳の周溝であると考えられる。一方、中央丘陵部東斜面では方形に巡る溝状遺構（SD33）を検出しており、９世紀後半の灰釉陶器が出土している。また、調査区西端では窯状遺構（SX45）およびそれに付随すると思われる炭化物の詰まった土坑（SK44）を検出しており、東谷部西側斜面上端付近でもこれに類似する土坑（SK32）を検出している。SX45・SK44・SK32から遺物は出土していないが、いずれも古代以降の遺構と考えられる。

第２面（第８図）では東谷部東端で、楕円形を呈する竪穴住居跡１基（SH60）を検出し、床面付近か

ら弥生時代後期と考えられる土器片が出土している。縄文時代中期以前に属すると考えられる遺構としては、東谷部中央で竪穴住居跡１基（SH71）を検出している。縄文時代中期の遺物包含層の直下で検出しているが、遺構内から遺物は出土していない。また、東谷部東端では石囲炉１基（SK72）を検出しており、縄文時代中期前葉の土器が出土している。

そのほか、東谷部中央を中心に複数の土坑・小穴が確認されており、それらの大部分は縄文時代中期に属すると考えられる。東谷部では包含層や土坑内から縄文土器片・石鏃・石匙・打製石斧・石器剥片・焼礫が出土した。一方、西谷部では確実な縄文時代の遺構が確認されなかったが、包含層より縄文土器片・石鏃・石匙等が出土している。

第２節　花倉大柳遺跡の調査成果

１　縄文時代の遺構と遺物

⑴　SH71

【遺構（第９図）】

東谷部中央第２面のB10・11、C11グリッドで検出した竪穴住居跡である。平面形はややいびつな円形を呈しており、北端部はトレンチに切られている。住居の東西壁面は直立気味に立ち上がっており、南側では緩やかに傾斜している。残存する住居掘方の長軸は約4.2m、短軸は約4.5m、壁上端からの深さは約20～30㎝である。壁溝および炉跡は確認できなかった。

確実な柱穴は６基検出されており（Ｐ２～Ｐ７）、住居の平面形に沿って巡るように掘られている。検出された柱穴の直径は20～40㎝、深さは10～20㎝程度である。遺構の覆土は黄褐色～褐色粘質土（第９図２・３層）であり、粘性が強く締まりがあるのに対し、柱穴の覆土は粘性が弱く、締まりを欠いている。

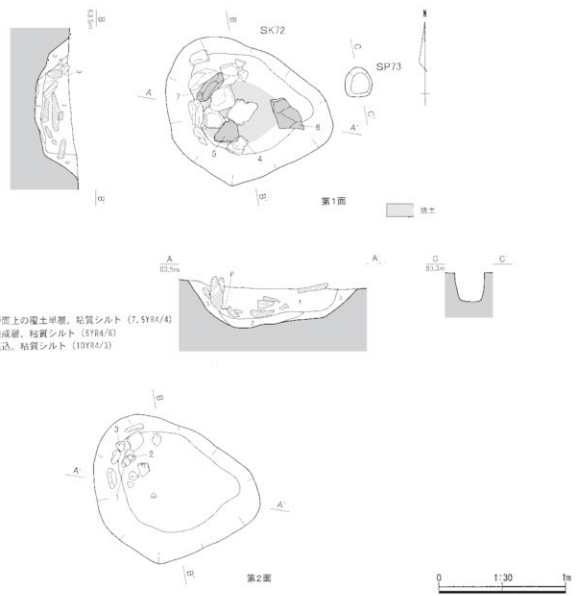
住居内から遺物は出土していないが、縄文時代中期の包含層（Ⅴ層：第９図１・４・５層）の直下で遺構を検出しているため、所属時期は縄文時代中期以前と判断される。

第10図　SD66平面図・断面図

⑵　SD66

【遺構（第10図）】

西谷部第２面のＥ７グリッド北部で検出している。溝の北側は調査区外のため未検出であり、中央部東側はトレンチに切られている。溝の北半部はほぼ南北方向に延びており、南半部では東方向にわずかに屈曲する。検出長は約3.2m、検出幅は約20㎝、深さは約20㎝であり、断面はU字形を呈している。覆土は黒褐色粘質シルトである。遺構内から遺物は出土していないが、縄文時代中期の包含層（７層）の下面で検出しており、縄文時代中期以前の遺構と判断される。



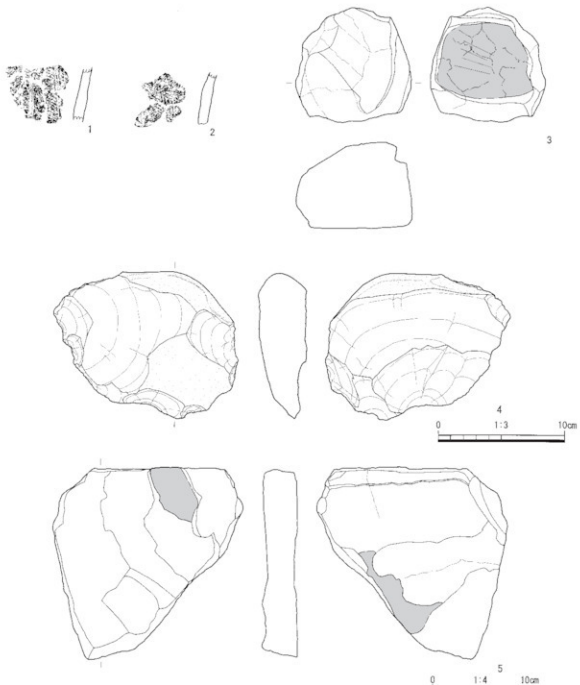
第11図　SK72、SP73平面図・断面図

⑶　SK72・SP73

【遺構（第11図）】

いずれも東谷部第２面のB12グリッド北東部からC12グリッド南東部にかけて検出している。SK72はややいびつな楕円形を呈する土坑であり、検出長は約1.4m、検出幅は約1.1m、深さは約36㎝である。底面はほぼ平坦に掘り込まれており、立ち上がりは急峻である。覆土は褐色粘質シルトである。

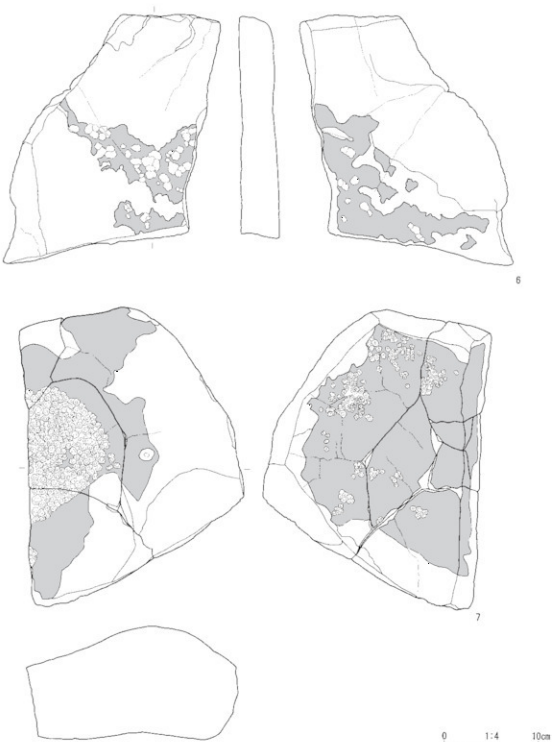
土坑の内部で36個の集石が検出されており、石囲炉と考えられる。炉の構築材の石材は凝灰質砂岩であり、大井川層群の露頭から採取されたものと考えられる。これらの構築材のうち、北西側の４～５個が直立した状態で原位置を保っており、残りの石は炉の内側や中央に転落していた（第11図第１面）。ほとんどの構築材の全表面が赤化焼成し、被熱により劣化しており、原位置を保つ構築材についても、内側１面のみ赤化している構築材は少ない。また、原位置を保つ構築材の外側にも構築材が詰められており（第11図第２面）、土器片（１・２）は、それらの構築材の間に挟まった状態で出土していた。このことから、構築材のほとんどが炉構築当時から数回にわたって据え直されたことが窺われる。



第12図　SK72出土遺物１

一方で、炉底の焼成面は１面であり、炉内に転落した構築材の直下に堆積する土も上部の土と変化がなく、炉の覆土（第11図１層）は単層である。このことから、炉の使用時期に明確な画期を見出すことはできず、一時期に連続して使用された炉であると考えられる。縄文時代中期前葉の土器（第12図１・２）が出土しており、石囲炉の所属時期は縄文時代中期前葉であると考えられる。

SP73はSK72の東側で検出した小穴である。検出長は約24㎝、検出幅は約21㎝、深さは約24㎝であり、底面が平坦に掘り込まれている。覆土は褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。SK72との関連は不明である。

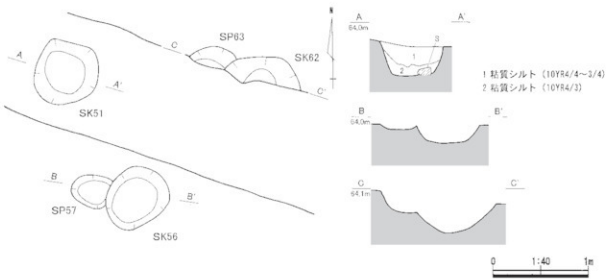


第13図　SK72出土遺物２

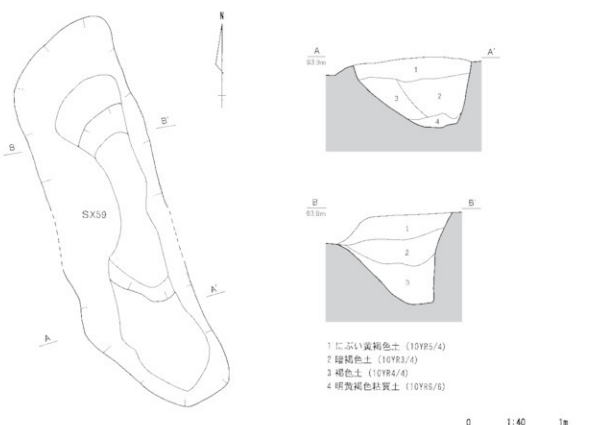
【出土遺物（第12図１～第13図７）】

１・２は縄文時代中期前葉の北裏C式併行期の土器であり、いずれも同一個体と思われる。胴部に幅２㎜の半截竹管状工具による斜位の沈線を付け、縦位の沈線で区画している。

３～７は石器であり、３は砥石、４は礫器、５～７は石皿である。３は扁平な円礫の表面全体に研磨による平坦部が生じている。４は表面および上端部に原礫面が残り、側縁から下端部にかけて剥離調整



第14図　SK51・56・62、SP57・63平面図・断面図



第15図　SX59平面図・断面図

を施して刃部を作り出している。５・６は表面に擦り面が認められ、６は表面の一部に敲打痕が認められる。７は表面中央および裏面の一部に敲打痕が認められる。

⑷　SK51・56・62、SP57・63

【遺構（第14図）】

いずれも東谷部第２面のB10グリッド中央部で検出しており、底面がほぼ平坦に掘り込まれる楕円形の遺構である。SK51はトレンチ内部で検出しており、検出長は約74㎝、検出幅は約70㎝、深さは約40㎝である。遺構の覆土は粘質シルトである。SK56は検出長約70㎝、検出幅約60㎝、深さは約20㎝、SP57は検出長約48㎝、検出幅は約36㎝、深さは約10㎝である。SK62は検出長約80㎝、検出幅約26㎝、深さは約37㎝、覆土は黒褐色粘質シルトである。SP63は検出長約50㎝、検出幅約20㎝、深さは約24㎝、覆土は黒褐色粘質シルトに地山由来の砂を含む。SK56は西側をSP57に切られ、SP63は東側をSK62に切られている。SK57より縄文土器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

いずれの遺構も縄文時代中期の包含層（Ⅳ－２層）内で検出しており、縄文時代中期以前の遺構と考えられる。

⑸　SX59

【遺構（第15図）】

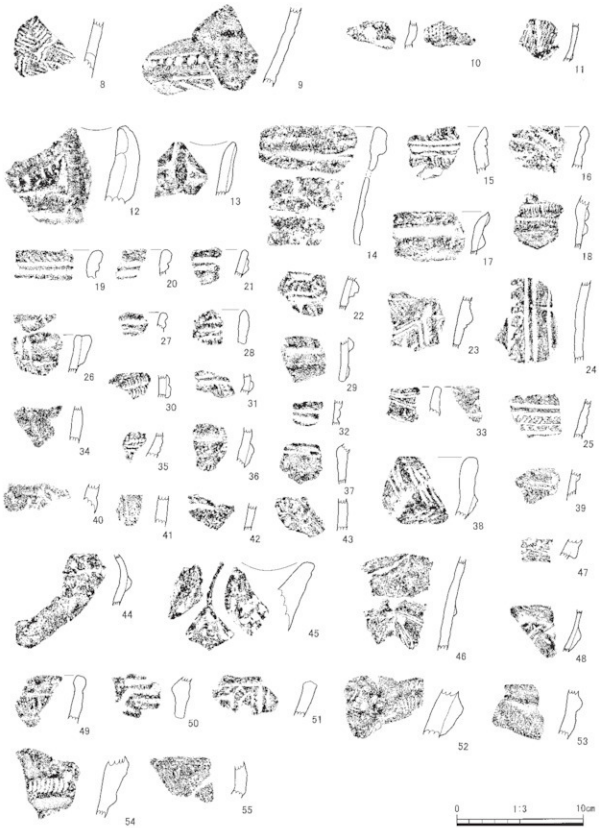
東谷部第２面のB12グリッド北西部で検出した、非常に深く切り立つ壁を有する土坑状の遺構である。平面形は細長い楕円形であり、北北西から南南東に延びている。検出長は約4.2m、幅は約1.2m、深さは約94㎝である。断面は東側ではほぼ垂直に掘り込まれ、西側の傾斜は緩やかである。遺構内から縄文土器の破片が出土しているが、細片のため図示できなかった。SX59は縄文時代中期の包含層（Ⅳ－２層）内で検出しており、縄文時代中期以前の遺構と考えられる。

⑹　遺構外出土縄文土器（第16図８～第17図89）

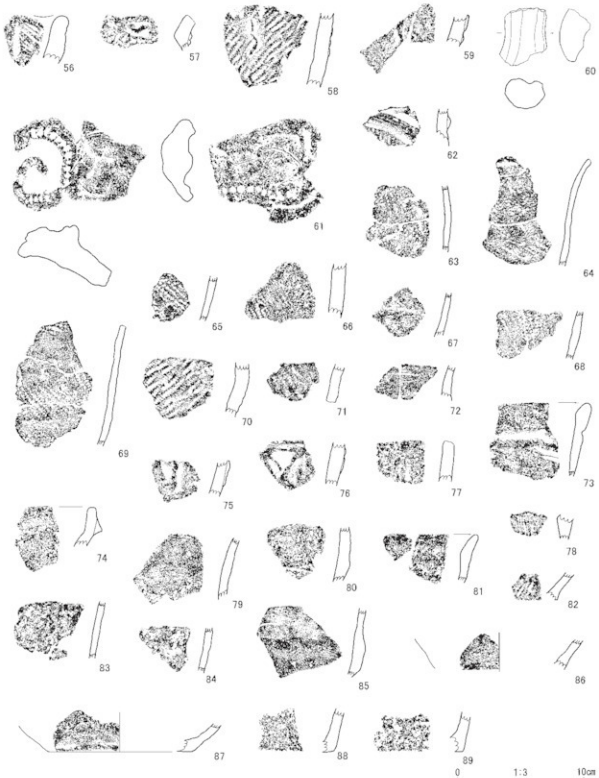
８は押型文土器であり、幅３㎜の鋸歯状の沈線を施文している。９は田戸下層式土器であり、幅９㎜の低めの粘土隆帯を横位に付け、粘土紐上部に幅５～８㎜の半截竹管状工具で刺突をC状に付ける。下部には幅10㎜の低い粘土紐を付け、幅４㎜の半截竹管状工具で斜位と横位に沈線を付ける。

10・11は鷹島式土器である。10は外面に横位の粘土紐隆帯を貼り付ける。隆帯上には条の太さ2.5㎜のRLの縄文を付け、径８㎜の円形刺突を施す。内面には条の太さ2.5㎜のRLの縄文を付けている。11は幅２㎜、高さ２㎜の粘土紐で区画し、区画内に条の太さ２㎜のRの縄文を付けている。

12～19・21～43・47は北裏C式と思われる土器である。12は波状口縁の波頂部より幅12㎜、高さ11㎜の粘土紐を垂下し、粘土紐の上部に幅13㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を付け、区画内には竹管状工具で刻目文を付けている。13は波状口縁に沿って粘土紐隆帯を貼り付け、上部に半截竹管状工具で連続爪形文を付けている。14は口縁に沿って幅10㎜、高さ４㎜の粘土紐を横位に付け、その上に幅10㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を施している。15は口唇部を尖らせ、口縁に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付け、その下に条の太さ約３㎜のRLの縄文を付ける。口縁部の下には幅４㎜の半截竹管状工具で横位の蒲鉾状沈線を付け、粘土紐の上部に幅11㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を付けて、一部をつまむ。16は口縁部から幅９㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を付けている。17は口縁に沿って幅12㎜、高さ６㎜の粘土紐を横位に貼り付け、上部に幅12㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を施している。18は幅10㎜の粘土紐を横位に貼り付け、粘土紐の上部に幅11㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を付ける。19は口縁に沿って半截竹管状工具で斜位に沈線を入れ、横位の沈線で区画している。21は粘土紐による３条の横位隆帯を付けているが、隆帯上部の施文が風化により不明である。22は幅13㎜の粘土紐を貼り付け、上部に半截竹管状工具で連続爪形文を施す。地文には条の太さ２㎜のRLの縄文を付け、三角刻目状文を施している。23は幅13㎜の粘土紐で弧状の区画と縦位の区画を施した後、条幅３㎜のLRの多条縄文を付



第16図　遺構外出土土器１



第17図　遺構外出土土器２

け、粘土紐の区画内を幅４㎜の半截竹管状工具で区画し、ヘラ状工具や半截竹管状工具で刺突を入れている。24は幅６㎜の半截竹管状工具で縦位に区画し、区画内に条の太さ３㎜のRLの縄文を縦位に回転施文し、三角状の刻みを入れている。25は幅５㎜の半截竹管の横位の沈線で区画し、区画内に条の太さ２㎜のLRの縄文を付け、幅５㎜の三角状の刻目を付けている。26は風化しているが、口縁部に沿って粘土紐を貼り付け、粘土紐の上部に半截竹管状工具で連続爪形文を付け、横位の沈線で区画する。27は口縁に沿って粘土紐を横位に貼り付ける。28は風化しているが、半截竹管状工具で横位の沈線を付けている。29は口縁に沿って幅９㎜、高さ４㎜の粘土紐を貼り付け、上部に幅10㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を施している。30は粘土紐隆帯を横位に貼り付け、半截竹管状工具で連続爪形文を付けている。31は幅11.１㎜の粘土紐隆帯を横位に貼り付け、その上に条の太さ３㎜のRLの縄文を付け、幅６㎜の半截竹管状工具で弧状の沈線を付けている。32は幅９㎜の半截竹管状工具で連続爪形文を付け、その下に幅７㎜の半截竹管状工具で横位の蒲鉾状平行沈線を付ける。33は口縁に沿って幅２㎜のLRの縄文を付け、幅３㎜の半截竹管状工具で弧状の沈線を付けている。内面には段がついている。34は口縁部付近の破片であり、三角形状の刻目を施している。35は縄文を付け、幅３㎜の半截竹管状工具で横位の沈線を付けている。36は風化しているが、横位の粘土紐隆帯を付け、隆帯に沿って半截竹管状工具で連続刺突を付けている。37は器面が風化しているが、条の太さ約３㎜の縄文を付けている。38は口縁部から弧状に粘土紐を貼り付け区画し、区画内には地文に条の太さ１㎜のLRの縄文を施し、幅４㎜の半截竹管状工具で弧状の密接蒲鉾状平行沈線を付ける。39は横位の隆帯と沈線を施している。40は器面が風化しているが、横位の粘土紐を付け、その上に半截竹管状工具で連続爪形文を付け、その下に半截竹管状工具でペン先状の刺突を入れる。41は風化しているが、幅６㎜の半截竹管状工具で縦位の沈線を付けている。43は風化しているが、半截竹管状工具で縦位の沈線と弧状の沈線を付けている。47は横位の隆帯の上部に幅10㎜の連続爪形文を付け、竹管状工具で刺突を付けている。

20は中期中葉の東海系土器である。風化しているが、口縁に沿って幅４㎜の半截竹管状工具で横位の沈線を付ける。

42は北裏C式併行期の土器である。条の太さ約３㎜のRLの縄文を付けて、幅７㎜の半截竹管状工具で横位に区画している。

44・45は北屋敷式土器である。44は風化しているが、粘土紐隆帯を貼り付けて区画している。45は角状把手であり、器面が風化しているが波状口縁に沿って径４㎜の竹管状工具で斜位に刺突を施している。

46は北裏C式以後の土器であり、幅10㎜の粘土紐で区画した中に幅３㎜の半截竹管状工具で縦位の沈線を付ける。

48は中期前半の土器であり、風化しているが、胴部に粘土紐を円形に貼り付け、上部に連続爪形文を付けている。

49・50は狢沢式土器である。49は口縁に沿って２㎜大の半截竹管状工具による櫛歯状の連続刺突を横位と縦位に付け、その下は竹管状工具で円形に刺突を施している。50は竹管状の工具で刺突を施している。

51～55は勝坂式土器である。51は風化しているが、縄文を付けて半截竹管状工具で区画し、三叉状の沈線を入れている。52は粘土紐の隆帯で区画した中に幅28㎜の半截竹管状工具で連続刺突を付けている。53は風化しているが、粘土紐による隆帯部に半截竹管による爪形文が施されていると思われる。隆帯で区画した中には三角状の刻目を付ける。54は隆帯に沿って半截竹管状工具で連続爪形文を付けている。55は風化しているが、外面に縄文を施していると思われる。

56は勝坂式併行期の土器であり、波状の口縁部から半截竹管状工具で縦位に区画し、幅６㎜の半裁竹管状工具で斜位に沈線を施している。

57～59は曽利Ⅱ式土器である。57は粘土紐隆帯を波状に貼り付けて沈線を施している。58は地文に幅約４㎜の半截竹管状工具で密接蒲鉾状平行沈線文を斜位に付けて、幅４㎜の粘土紐を縦位の波状に垂下している。59は風化しているが、粘土紐隆帯を縦位の波状に付けている。60は曽利Ⅲ式のX字状把手である。

61は曽利Ⅱ式または唐草文系の釣手把手であり、端部を欠損している。隆帯による渦巻の中に先端を三角形状にした幅６㎜のヘラ状工具で刺突しており、内側の一部にも同一工具による刺突が付けられる。

62は中期後葉の土器であり、幅９㎜、高さ３㎜の粘土紐で区画した中に条の太さ２㎜のLRの縄文を斜位に付ける。

63～65・67～69・84は同一個体であり、中期中葉の東海系の土器と思われる。原体の長さが3.2㎝、条の太さが３㎜のRLの縄文を横位の帯状に付けている。64は口縁部に幅２㎜の粘土紐を付ける。

66は勝坂式土器と思われ、風化しているが条の太さ３㎜のRLの縄文が付いているのがわかる。

70・71は中期に属すると思われる土器である。条の太さ３㎜、長さ2.1㎝のRLの多条縄文を付ける。71は条の太さ３㎜のRLの縄文が付いている。72は中期の東海系の土器であり、風化しているが、沈線と刺突が一部に付いているのがわかる。

73は中期中葉の東海系の土器である。風化しており文様は不明であるが、口縁部と胴部の境に段が付き、一部に半截竹管状工具の沈線が付いているのがわかる。

74は勝坂式土器と思われる。風化しているが、口縁部に隆帯を弧状に貼り付けているのがわかる。

75・76・78は風化しているが、中期の土器である。75は粘土紐を貼り付けている。76は粘土紐隆帯を弧状もしくは三角状に貼り付けている。78は条の太さ２㎜のLRの縄文を付けた後、幅２㎜の半截竹管状工具で縦位の沈線を付けている。77は風化しており、文様は不明である。

79～81は風化により文様が不明である。79は中期の東海系の土器、80は中期中葉の土器と思われる。81は型式が不明である。

82・83は風化しているが、東海系の中期中葉の土器と思われる。82は底部に縄文を付け、半截竹管状工具で沈線を斜位に付けている。83は文様が不明である。85は風化により型式が不明である。

86～89は底部付近の破片であるが、風化しており文様は不明である。87は底部が薄くなっており、東海系の中期中葉の土器と思われる。

２　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

⑴　SH60

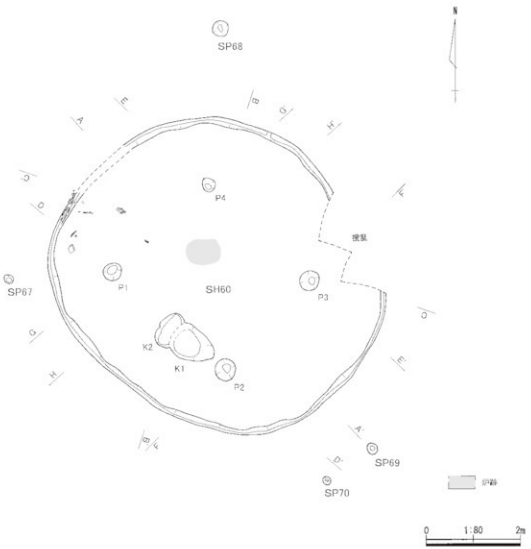
【遺構（第18・19図）】

東谷部第２面東端のB12グリッド中央部で検出した竪穴住居跡である。掘方の平面形は楕円形であり、主軸方向はN－47°－Wである。掘方の長軸は約７m、短軸は約６m、深さは約60㎝である。幅約20㎝、深さ約10㎝の壁溝が全体に残存しているが、北東側と北西側はトレンチおよび撹乱に切られている。床面はほぼ平坦であるが、貼床は認められなかった。

住居内部の南西側で２基の土坑（K１・K２）が検出されている。K１は検出長約１m、検出幅約70㎝、深さ約13㎝、覆土は暗褐色土である。K２は検出長約80㎝、検出幅約40㎝、深さ約17㎝であり、K２の東側がK１に切られている。K２の覆土は暗褐色粘質シルトであり、地山由来の砂を含む。

主柱穴は４基（P１～P４）検出されており、直径30～40㎝、深さは10～40㎝、主柱穴の柱間は3.0×2.6mである。床面の中央よりやや北西側で検出長約69㎝、検出幅約54㎝、深さ約10㎝の地床炉が検出されている。また、北西側の床面直上からは炭化木材が検出された。

床面直上から弥生時代後期に属すると見られる土器片が複数出土しているが、細片のため図示できな



第18図　SH60平面図

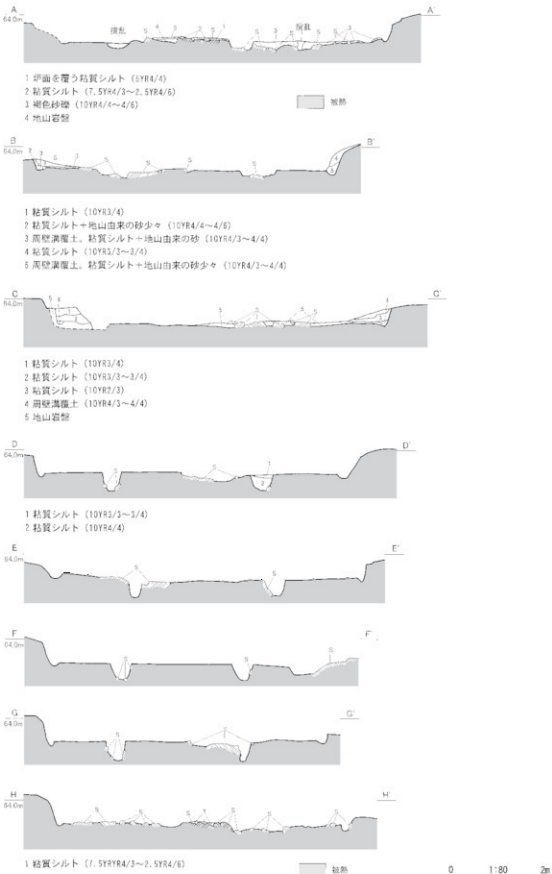
かった。出土土器および遺構の形状から弥生時代後期の住居跡と考えられる。

⑵　SH37、SP54・55・64

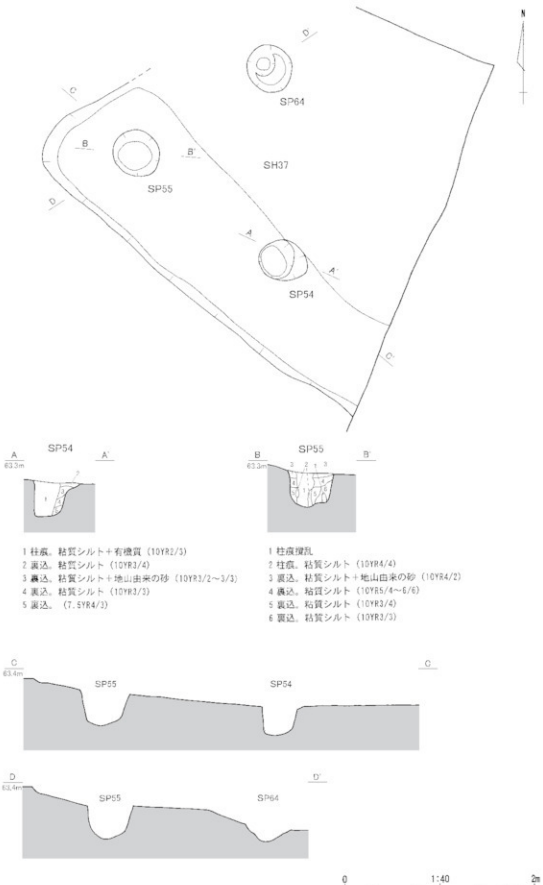
【遺構（第20図）】

東谷部のC11グリッド北部で検出している。第１面の調査時にSH37を溝状遺構として検出し、第２面の調査時にSP54・55・64を検出しているが、調査終了後の整理作業でピット群の写真・土層注記を確認した際に、SP54・55・64の覆土が第１面のSD03等の遺構と極めて類似していたため、第１面の遺構群と同じ所属時期であると考え、これらのピットの上端の標高がSH37の下端とほぼ同じ値か、それより数㎝下がった値を示していることから、SH37が竪穴住居の掘方で、SP54・55・64がその主柱穴であると判断した。柱穴の規模は径約50㎝、深さは約40㎝である。SP54の覆土には黄褐色の地山ブロックが入り込んでいる。

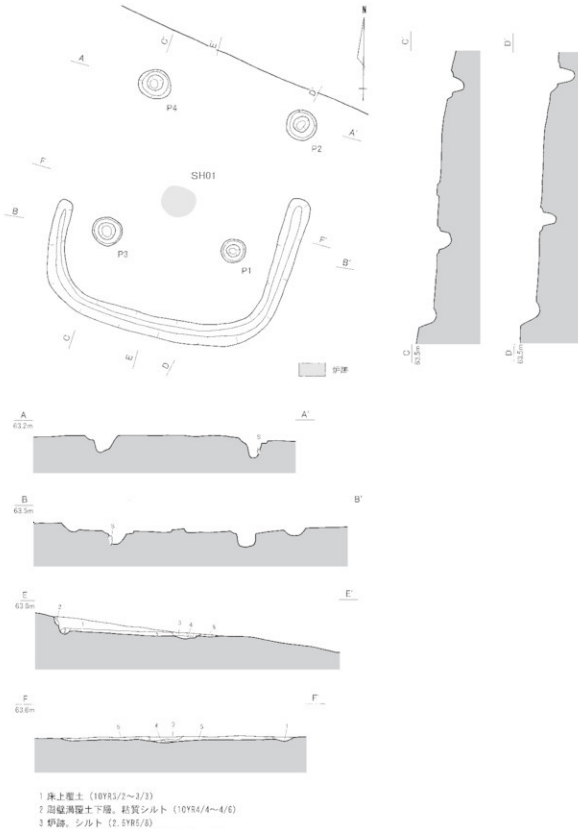
SH37の平面形は方形であり、住居の規模は推定４ｍ×４ｍ、底面から検出面までの壁の立ち上がりは約５㎝、主柱穴の柱間は約1.8ｍである。南側では壁が直立し、掘方の底面が北東方向に緩やかに傾斜しているが、北側は斜面のため流失している。住居の覆土は暗褐色粘質シルトである。SH37の完掘時に柱



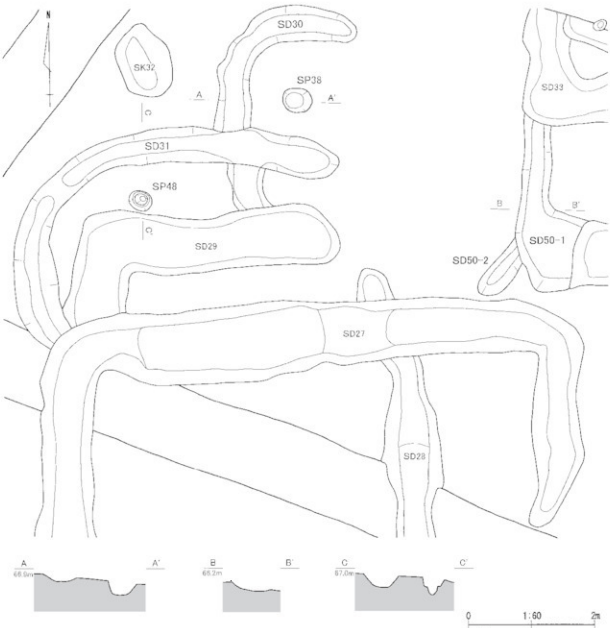
第19図　SH60断面図



第20図　SH37平面図・断面図



第21図　SH01平面図・断面図



第22図　SD30・31・50－1・50－2平面図・断面図

穴が検出できなかったことと、柱穴上端の標高がSH37の下端より数cm下がることから、SH37完掘時には貼床が残っていた可能性が高い。壁溝の存在は確認できなかった。住居の掘方は南西側の約１／３が残るのみであり、炉は確認できなかった。

遺構内から遺物は出土していないが、遺構の形状および周辺の出土遺物から古墳時代前期の竪穴住居跡と推定される。

⑶　SH01

【遺構（第21図）】

東谷部第１面のC12グリッド南東部で検出した竪穴住居跡である。住居の平面形は隅丸長方形であり、主軸方向はN－19°－Eである。掘方は南半部のみ残存しており、残存範囲は長軸が約3.1m、短軸が約

2.0m、深さは最大で約20㎝である。南側の覆土掘り下げ部では、堅固にしまり炭化物の広がる貼床を全面で検出しており、床面はほぼ平坦である。住居南半部の壁際では幅が約20㎝、深さが約10㎝の壁溝を検出した。

遺構検出面はなだらかに北側に向かって傾斜しており、北半部では主柱穴の一部のみが残存する。住居の覆土は暗褐色土である。

主柱穴（Ｐ１～Ｐ４）は４基検出しており、検出された直径は約30～40㎝、深さは約20～30㎝、主柱穴の柱間は約1.7×2.0mである。柱穴の掘方は、平坦なテラスを持ち柱部分が１段下がった２段掘方になっている。いずれも覆土は単層で柱痕は検出できなかった。また、住居の中央で直径40㎝程度の円形に広がる焼土が確認され、地床炉と考えられる。

周壁溝南西部より土師器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。遺構は弥生～古墳時代の遺物包含層（Ⅲ層）の下層で検出しており、平面形が方形で炉が地床炉であることから、古墳時代前期頃の住居跡である可能性が高い。

⑷　SD30・31・50－1・50－2、SP38・48

【遺構（第22図）】

東谷部第１面のＢ９グリッド北部からＣ９グリッド南部にかけて検出している。SD30・31・50－2はいずれも円形もしくは隅丸方形に巡る溝であり、SD31はSD30を切っている。SD50－2はSD30・31と同様の規模・形状を持ち、SD30の描く円弧上に乗るため、SD30とSD50－2は同一の遺構である可能性がある。SD50－1は検出幅が45㎝～1.2m、深さが約10㎝であり、北側ではSD33に切られ、ほぼ南北方向に延びる。南側では東方向に屈曲してSK24に切られる。

SD30・50－2の規模は両溝外縁からの直径が約5.5mであり、溝の幅は約45㎝、深さは約25㎝である。いずれの溝も、方形周溝墓と推定されるSD26～29と比較すると幅が狭くて深さが浅く、断面は逆台形を呈する。SD30の覆土は暗褐色粘質シルト、SD31の覆土は黒褐色粘質シルトである。

SP38・48はSD30・SD31に囲まれた内側で検出しており、溝の各辺からほぼ等距離に位置する。直径は約30～40㎝、深さは約20㎝である。SP38の覆土は暗褐色～褐色粘質シルトである。SP48の覆土は褐色土粘質シルトであり、地山由来の砂を少量含む。

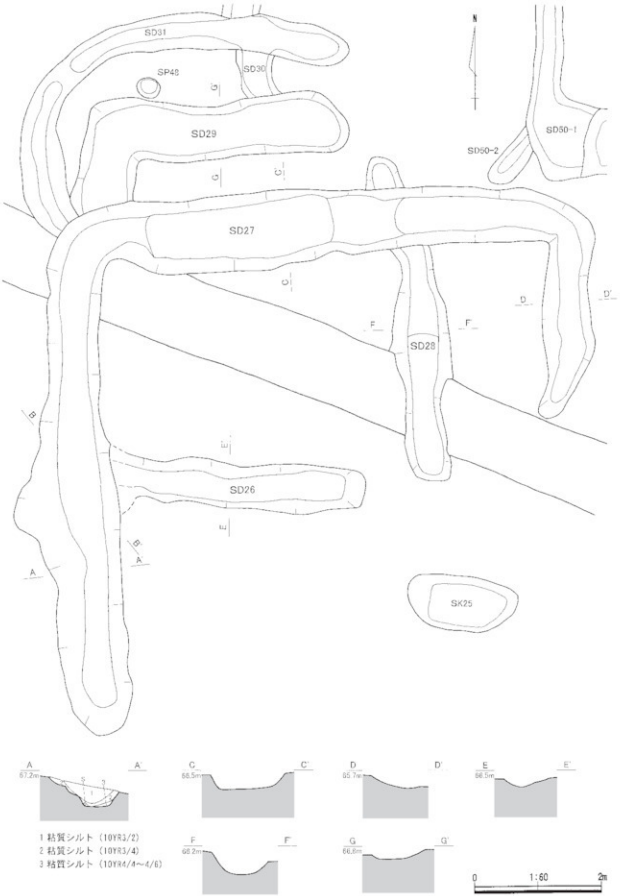
いずれの遺構も遺物は出土していないが、遺構の形状と立地より、SD30・31・50－2は弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の住居の壁溝であり、SP38・48は住居の柱穴である可能性が高いと考えられる。

⑸　SD26～29

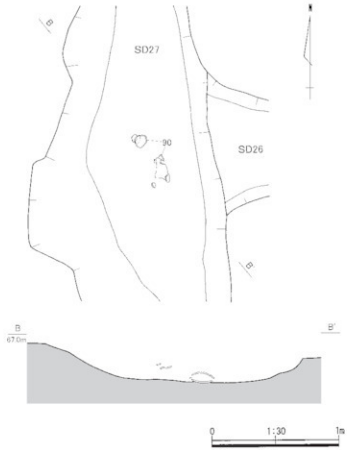
【遺構（第23・24図）】

いずれも東谷部第１面のＢ９グリッド南部からＣ９グリッド北部にかけて検出した溝状遺構であり、隅が角張る方形に巡っている。SD26・28・29は形状や位置関係から方形で隅が途切れる一連の遺構と考えられる。SD27も北西隅と北辺中央で陸橋状の高まりが生じており、同様の形状となることが推測される。このうちSD27がSD28・29・31を切っており、最も新しい溝と考えられる。SD26とSD27の切り合いは撹乱により確認できなかったが、SD26・28・29を一連の遺構と捉えた場合、SD27がSD26より新しいことが推測される。

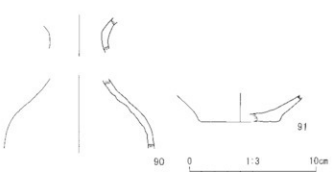
溝の外周の規模はSD26・28・29が東西約5.7m、南北約6.6m、SD27が東西約8.6m、南北約8.4mであり、長軸はほぼ南北方向である。溝の幅は約0.5～1.5m、深さは約30～40㎝であり、断面形は逆台形またはU字形である。SD26の覆土は黒褐色土～暗褐色粘質シルト、SD27は黒褐色粘質シルト、SD28・



第23図　SD26～29平面図・断面図



第24図　SD27遺物出土状況



第25図　SD27出土遺物

29は暗褐色粘質シルトである。

SD26・27から土師器片が出土しており、そのうちSD27西辺中央の下層で出土した土師器の壺破片（第25図90・91）を図化している。出土遺物は破片が多く、器表面の摩滅が激しいため正確な年代は不明だが、およそ弥生時代後期末から古墳時代前期に属すると考えられる。遺構の形状や出土遺物の年代から、これらの溝は２基の方形周溝墓である可能性が高い。

【出土遺物（第25図90・91）】

90・91はSD27出土の古式土師器壺であり、90は頸部～胴部破片、91は底部破片である。いずれも摩滅が激しく調整は不明である。

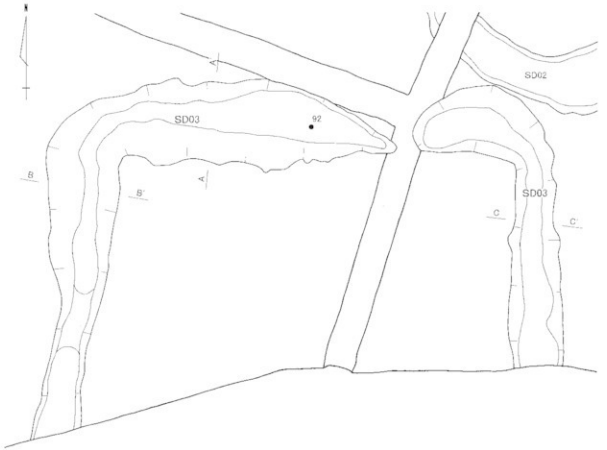
⑹　SD03

【遺構（第26図）】

東谷部中央南端第１面のＡ９・10・11、Ｂ９・10・11グリッドで検出した長方形に巡る溝である。検出された溝の外周の規模は東西約19m、南北12.5mである。南半部は調査区外になっており、崖で崩落している。溝の検出幅は約1.4～3.5m、深さは北側と西側で約80～90㎝、東側では約30㎝である。溝の断面は逆台形を呈しており、北辺では内側法面の方が傾斜は緩い。溝に囲まれた内側は長方形の台状を呈しており、台部の上面は平坦である。北辺の中央部で溝が陸橋状に断絶しており、断絶部分の溝端部は丸く終息している。また、西辺中央でも同様の陸橋状の高まりが観察された。

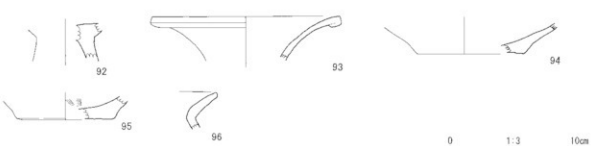
覆土の中層以上では自然堆積と見られる黒褐色土（第26図１～４層）が堆積するが、溝底部の内側法面には暗褐色土（第26図５～７層）が堆積しており、溝の埋没初期に溝の壁面に沿って流れ込んだものと考えられる。溝に囲まれた内側では地山が平坦に削られていたが、その上にこの暗褐色土が盛土として堆積していた可能性が高い。

遺物は溝覆土の中層以下で古式土師器（第27図92～96）が出土しており、92は北辺中央で溝底に張り付いた状況で出土している。溝の形状や出土遺物から、SD03は弥生時代後期末から古墳時代前期の大型方形周溝墓であると考えられる。

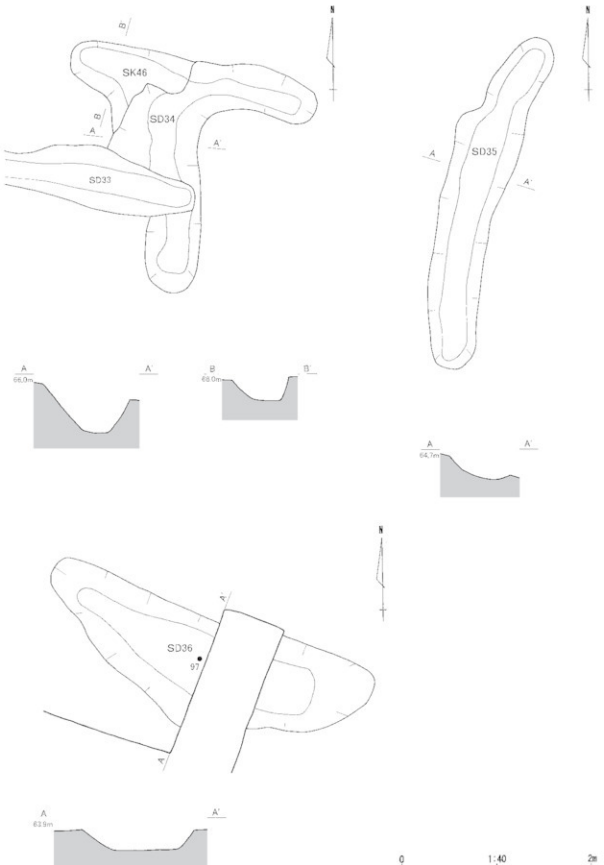


1 粘質シルト（10YR3/3）
2 粘質シルト（10YR2/2）
3 粘質シルト（10YR3/2）
4 粘質シルト（10YR2/1～2/2）
5 粘質シルト（10YR3/3）
6 粘質シルト（10YR2/3～3/4）
7 粘質シルト（10YR3/3～3/4）
8 粘質シルト（10YR3/2）
9 粘質シルト（10YR3/4～3/3）
10 粘質シルト（10YR3/4）

第26図　SD03平面図・断面図



第27図　SD03出土遺物



第28図　SD34～36、SK46平面図・断面図

第29図　SD36出土遺物

【出土遺物（第27図92～96）】

92～96は古式土師器であり、いずれも摩滅により調整は観察が困難である。92は高坏の脚部破片である。93～95は壺であり、93は折り返し口縁の破片、94・95は底部破片であり、95は底部内面に横方向のハケ目の痕跡が残る。96はくの字に外反する甕の口縁部破片である。口唇部を面取りし、口縁部内外面に横方向のハケ調整の痕跡が残る。いずれも弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に属すると考えられる。

(7)　SD34～36、SK46

【遺構（第28図）】

いずれも東谷部第１面のC10・C11グリッドで検出しており、断面は逆台形を呈している。

SD34・SK46はC10グリッド北西部で検出しており、SD34は北西部でほぼ直角に屈曲し、西側をSK46およびSD33に切られている。検出長が約3.6m、検出幅は約50㎝、深さは約50㎝である。覆土は黒褐色～暗褐色粘質シルトである。SK46は検出長が約1.2m、検出幅が約60㎝、深さは約24㎝である。覆土は暗褐色粘質シルトである。

SD35はC10グリッド北東部で検出しており、北北東から南南西方向に弓なりに延びる。検出長は約3.6m、検出幅は約60㎝、深さは約24㎝である。覆土は暗褐色粘質シルトである。

SD36はC10グリッド南東部からC11グリッド南西部にかけて検出しており、中央部をトレンチに切られている。北西から南東方向に延びており、底面はほぼ平坦である。検出長は約3.6m、検出幅は約1.2m、深さは約20㎝である。覆土は黒褐色粘質シルトである。

いずれの遺構も遺物は出土していないが、遺構の形状と周辺遺構の検出状況から、これらの遺構は弥生時代後期から古墳時代前期に属すると考えられる。SD36から打製石斧（第29図97）が出土しているが、縄文時代の混入品である可能性が高い。

【出土遺物（第29図97）】

97はSD36出土の打製石斧である。片面に原礫面を広く残し、両側縁に剥離調整を施す。刃部には使用痕が残る。

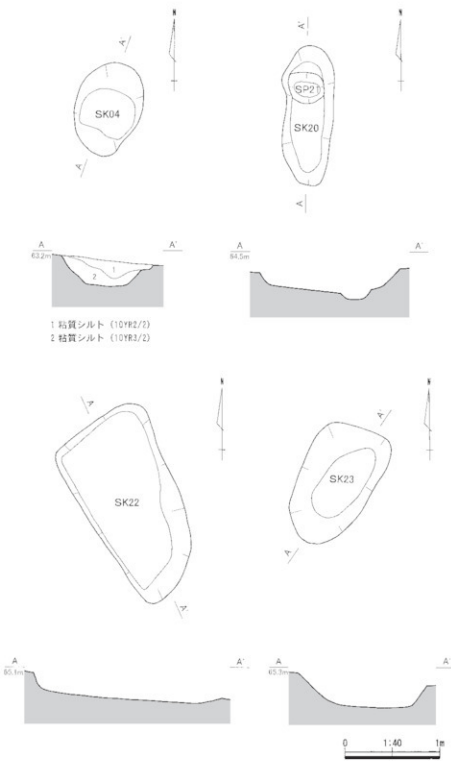
(8)　SK04・20・22～25、47、SP21

【遺構（第30・31図）】

東谷部第１面のＢ９・B10・Ｃ９・C10・C11グリッドで検出した土坑である。

これらの土坑のうち、SK22・24は平面形が長方形であり、山側の壁面はほぼ直立して、谷側はほとんど立ち上がりを持たずに斜面が流れる。底面はほぼ平坦だが、山側の壁面直下もしくは壁面寄りの中央がやや窪んでいる。SK22はB10グリッド北西部で検出しており、北西から南東方向に掘り込まれている。検出長は約2.0m、検出幅は約1.0m、深さは約35㎝である。覆土は暗褐色粘質シルトである。SK24はＣ９グリッド南東部からC10グリッド南西部にかけて検出しており、ほぼ東西方向に掘り込まれている。検出長は約2.3m、検出幅は約1.0m、深さは約50㎝である。これらの土坑の覆土はあまりしまりのない有機質混じりの土である。いずれの土坑も遺物が出土しておらず、年代は不明である。

SK4・20・23・25の平面形は長楕円形から隅丸長方形で、底部は船底状に丸みを帯びている。SK04はC11グリッド東部で検出しており、平面形は北東から南西方向に延びる楕円形に近い円形である。検出



第30図　SK04・20・22・23、SP21平面図・断面図

長は約1.0m、検出幅は約70cm、深さは約30cmである。

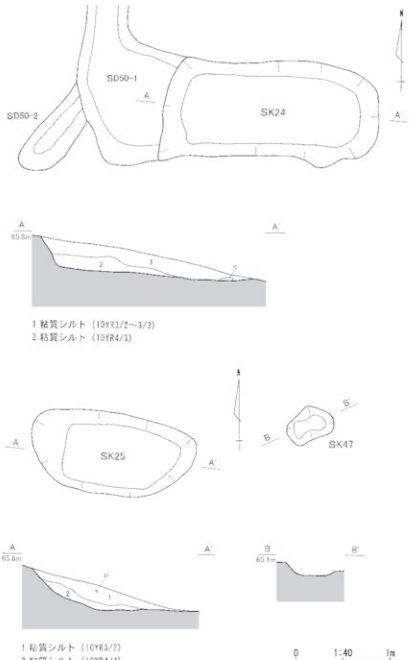
SK20はB10グリッド北部で検出しており、ほぼ南北方向に延びる細長い楕円形の土坑である。検出長は約1.5m、検出幅は約50cm、深さは約20cmである。覆土は黒褐色粘質シルトである。SK20北側の内部でSP21が検出されており、検出長は約40cm、検出幅は約32cm、深さは約10cmである。覆土は暗褐色粘質シルトである。

SK23はC10グリッド中央部で検出しており、北東から南西に掘り込まれた楕円形の土坑である。検出長は約1.3m、検出幅は約80cm、深さは約35cmである。覆土は黒褐色土～暗褐色粘質シルトである。

SK25はB９グリッド南東部で検出しており、平面形はほぼ東西方向に掘り込まれた隅丸長方形である。検出長は約1.7m、検出幅は約86cm、深さは約42cmである。土師器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

いずれの土坑も、覆土はしまりがやや弱い黒褐色土で、SD02・03の覆土と類似している。

SK47はＢ９グリッド東部で検出しており、平面が長方形に近い不定形である。北東から南西方向に掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。検出長は約50cm、検出幅は約36cm、深さは約17cmである。覆土は黒褐色粘質シルトである。遺構内より台付甕の台部破片が出土しているが、細片のため図示できな



第31図　SK24・25・47平面図・断面図

かった。

SK4・20・23・25・47についてはいずれも規模や形状が良く似ており、SD03とよく似た覆土が検出されていることから、弥生時代後期～古墳時代前期に属することが推定される。

3　古墳時代後期の遺構と遺物

SD02

【遺構（第32・33図）】

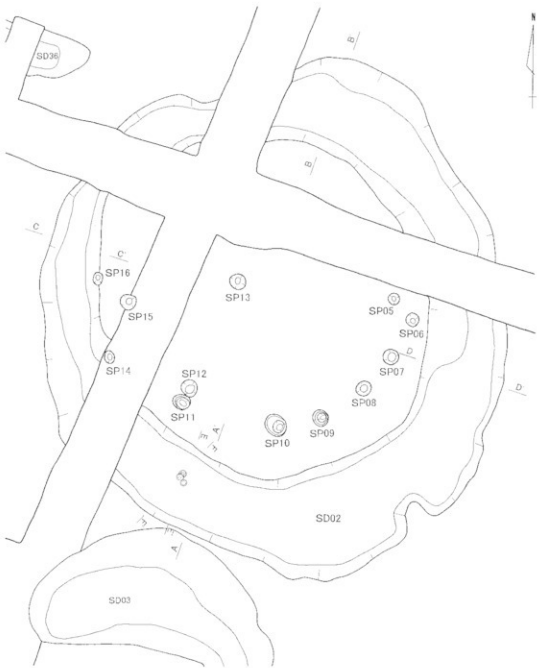
東谷部第１面のB11・12・C11グリッドで検出した円形に巡る溝であり、溝の幅は0.6～2.4m、検出された深さは約20cm、溝外周の直径は約10mである。溝の底は幅広く平らで、肩が湾曲しながら急激に立ち上がる。溝の覆土はほとんどが黒褐色土で、溝底に薄く褐色土が堆積する。

円形に巡る溝に囲まれた内側には、溝の覆土とは別の黒褐色土が堆積しており、溝に囲まれた中に別の土が盛られていた可能性が考えられる。

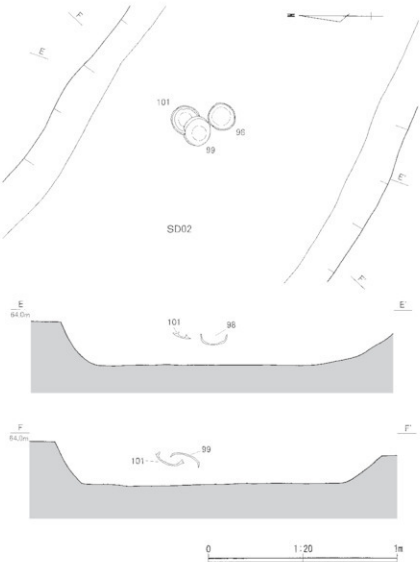
溝の内側では直径20～50cm、深さ15～35cm程度のピット12基（SP05～SP16）を検出しているが、溝に囲まれた内側で検出された黒褐色土の下層に堆積する縄文時代包含層（Ⅳ－１層）の上面で検出しており、これらのピット群はSD02と同時併存ではないと考えられる。

溝の南側で覆土最上層から須恵器の坏身破片（第34図100）が出土しており、南側の溝底にほぼ接する位置で、須恵器坏蓋（第34図98）、須恵器蓋坏１組（第34図99・101）がほぼ完形で出土している。このほか、土師器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

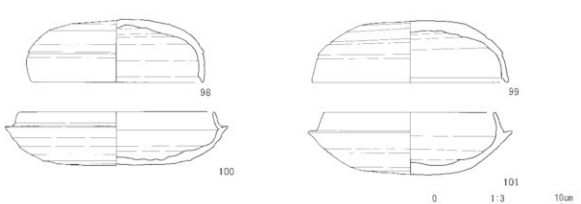
溝の形状・規模や出土遺物から、SD02は古墳時代後期前葉に築造された円墳の周溝である可能性が高く、墳丘盛土および埋葬施設は後世に流出したものと考えられる。周辺に石室を構成する石が存在しないことから、埋葬施設は木棺直葬である可能性が推測される。



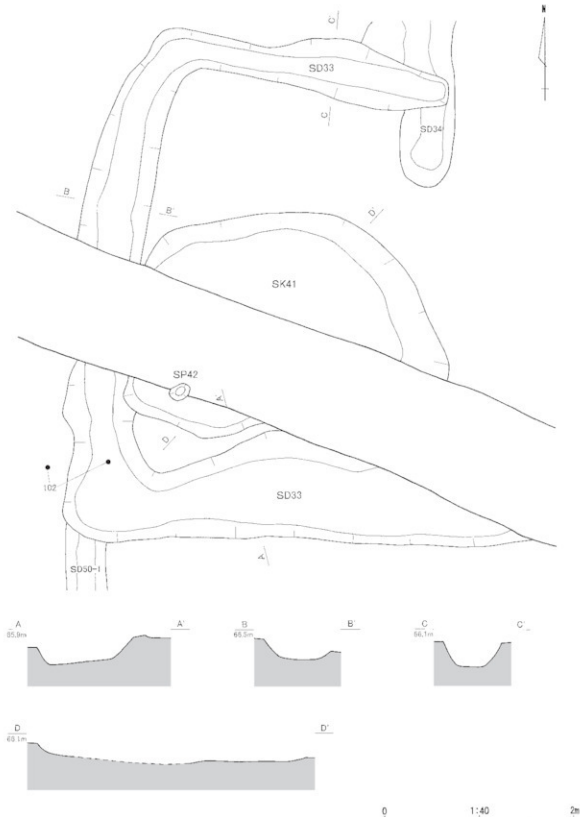
第32図　SD02平面図・断面図



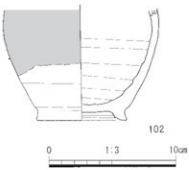
第33図　SD02遺物出土状況



第34図　SD02出土遺物



第35図　SD33、SK41平面図・断面図



第36図　SD33出土遺物

【出土遺物（第34図98～101）】

98～101は須恵器であり、98・99は坏蓋、100・101は坏身である。98は口縁部が直立し、口縁部と天井部との境に１条の沈線を施す。口唇部内面には浅い沈線が施され、天井部外面にヘラ削りを施す。全体的に歪みが生じており、口縁部外面には自然釉が付着している。99は口縁部がやや外反し、口縁部と天井部の境目に１条の沈線が施される。天井部外面にはヘラ削りを施し、上部に平坦面を持つ。口唇部内面には浅い沈線が施される。100・101は、受部が短く水平に引き出され、口縁部の立ち上がりがやや内傾し、口唇部は丸みを帯びている。底部外面にはヘラ削りを施す。100は口縁部が短く内傾し、受部真下の外面を凹ませる。98・99・101はTK10型式併行、100はTK43型式併行の製品と考えられる。

4　古代以降の遺構と遺物

(1)　SD33、SK41

【遺構（第35図）】

東谷部第１面のＣ９グリッド東部からC10グリッド西部にかけて検出している。SD33は方形に巡る溝状遺構であり、陸橋状の途切れを持たない。溝の外周の規模は東西約3.8m、南北約5.2m であり、検出された溝の幅は0.3～1.1m、深さは約30㎝である。溝の底面は平坦であり、北辺でSD34、南辺でSK41・SD50－1を切っている。中央部はトレンチに切られている。溝の覆土は暗褐色粘質シルトであり、上層より灰釉陶器長頸瓶（第36図102）が出土している。周辺で検出された方形周溝墓と比較すると溝の幅が狭くて浅く、陸橋状の断絶が確認されないことと、出土遺物の年代より、平安時代前期に属する遺構と考えられる。

SK41はSD33で囲まれた内側で検出しており、南側でSD33に切られている。平面形は円形に近い不定形であり、底部中央が浅く窪むすり鉢状を呈している。検出長は約3.4m、検出幅は約2.6m、深さは約20㎝である。覆土は暗褐色粘質シルトである。遺物は出土していない。

【出土遺物（第36図102）】

102はSD33出土の灰釉陶器長頸瓶の胴部から底部である。口頸部を欠損しており、胴部下半の外面にヘラ削りを施し、内面にはノタ目が残る。高台端部は緩やかに外傾し、断面は台形を呈している。胴部外面および底部内面に灰釉が付着している。９世紀後半（黒笹90号窯式併行）の助宗窯産の製品と考えられる。

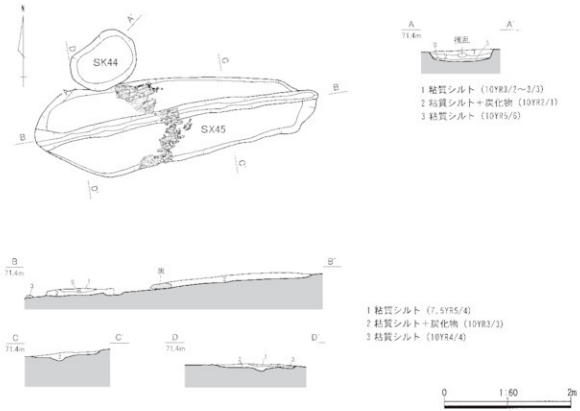
(2)　SX45

【遺構（第37図）】

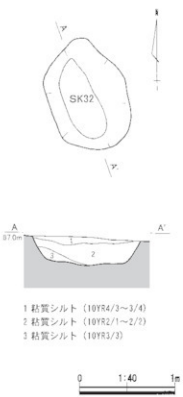
北西丘陵部第１面のＧ２グリッド北部で検出している。平面形は細長い楕円形であり、検出長は約4.6m、検出幅は0.9～1.4m、深さは約10㎝である。西端部はSK44に切られている。

遺構はほぼ東西方向に掘り込まれており、底面は西側に向かって緩やかに傾斜する。底面の中央部には主軸方向に沿って幅約20㎝、深さ約５㎝の細長い溝が掘り込まれる。

中央部には掘方の主軸方向に沿って並べられた炭化材が堆積しており、この炭化材の下には主軸に直交する方向に細い炭化材が並べられている。遺物が出土しておらず遺構の所属時期は不明であるが、古代以降の窯状遺構と考えられる。



第37図　SK44、SX45平面図・断面図



第38図　SK32平面図・断面図

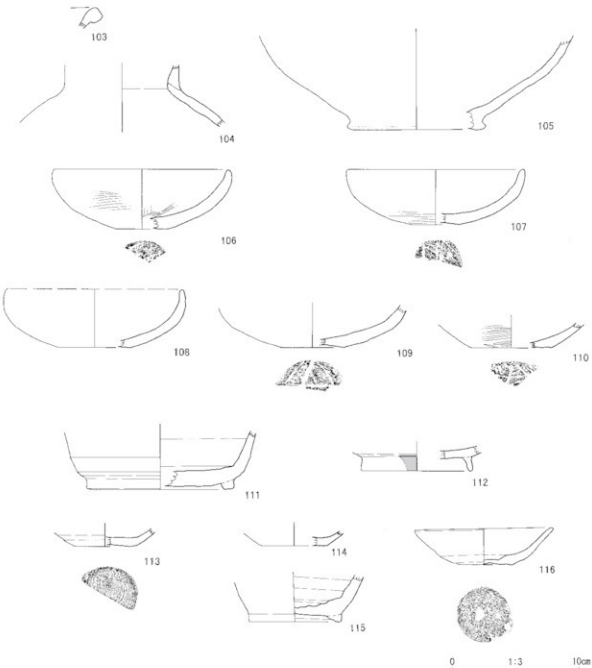
⑶　SK32・SK44

【遺構（第37・38図）】

SK32は東谷部第１面のＣ９グリッド西部で検出している。平面形は楕円形であり、北西から南東方向に掘り込まれ、底面は平坦である。検出長は約1.2m、検出幅は約84㎝、深さは約30㎝である。第38図２層から土師器片が出土しているが、細片のため図示できなかった。

SK44は平面形が楕円形の土坑であり、検出長は約1.1m、検出幅は約80㎝、深さは約20㎝である。南側でSX45の西端部を切っている。遺物は出土していない。

SK32・SK44はいずれも長径約１mの楕円形を呈し、炭化物を非常に多く含む粘質シルト（第37図A－A'断面２層、第38図２層）が堆積し、その上に地山土を含む粘質シルト（第37図A－A'断面１層、第38図１層）が約10㎝の厚さで乗っている。土坑の壁面が焼けているが、連続して激しく焼けた様子ではない。以上の点から、これら２基の土坑はいずれも火を使用する行為に伴う遺構と考えられる。



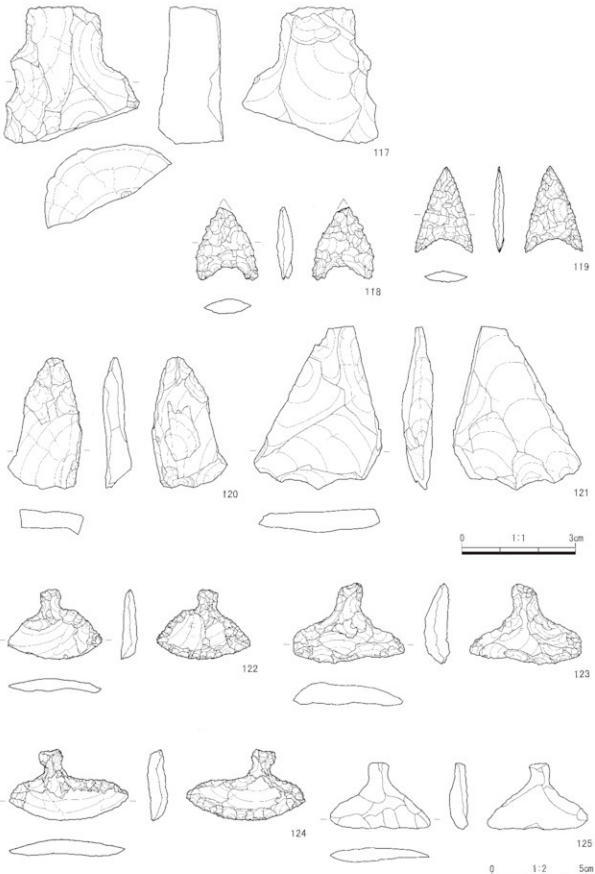
第39図　遺構外出土土器３

５　遺構外出土遺物

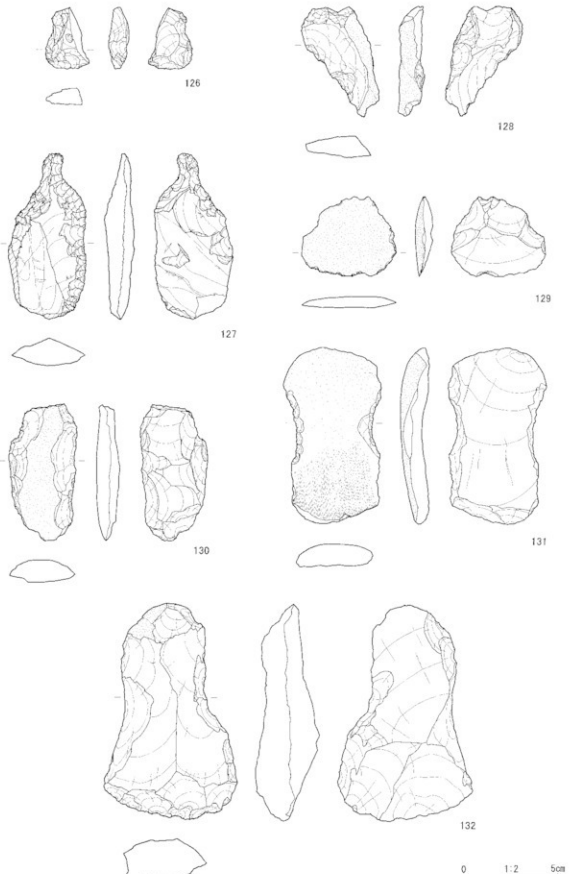
(1)　遺構外出土土器（第39図103～116）

103～105は古式土師器の壺であり、内外面ともに摩滅のため調整不明である。103は折り返し口縁の破片である。104は頸部～胴部の破片であり、頸部がほぼ直線的に立ち上がる。105は胴部～底部の破片である。

106～110は土師器の坏身である。106・107は口縁部がやや外傾しながら立ち上がり、口縁端部がやや内彎する。いずれも器面は摩滅が激しいが、106・107・110は外面に横方向のミガキ調整が施される。108以外は底部外面に木葉痕が観察される。いずれも古墳時代中期末～後期前半に属すると思われる。



第40図　遺構外出土石器１



第41図　遺構外出土石器２

第42図　遺構外出土石器３

111は須恵器坏身の胴部から底部破片であり、胴部外面にヘラ削りを施し、底部には高台を貼り付ける。助宗窯産の８世紀後半の製品と考えられる。

112・114・115は灰釉陶器であり、112・114は碗、115は長頸瓶である。112は底部破片であり、底部外面に糸切り痕が残り、高台端部がやや内傾して外側で接地する。高台部外面には灰釉が付着している。115は胴部から底部の破片であり、胴部外面にヘラ削りを施し、底部には断面が三角形状の高台を貼り付ける。底部内面に灰釉が付着している。いずれも９世紀後半（黒笹90号窯式併行）の助宗窯産の製品と考えられる。114は無高台碗の底部破片であり、底部外面に糸切り痕が残る。113は山茶碗の小皿であり、底部外面に糸切り痕が残る。東遠系の13世紀中葉の製品と考えられる。

116は土師器の坏身である。口縁部が大きく開き、底部内面の中心に窪みを持つ。底部外面には糸切り痕が残る。９世紀後半頃に属すると考えられる。

(2)　遺構外出土石器（第40図117～第42図135）

遺構外から出土した石器の器種は、角錐状石器、石鏃、石匙、スクレイパー、打製石斧、敲石、凹石等である。この他、図示できなかったが黒曜石の剥片が多数出土している。このうち角錐状石器（117）は旧石器時代に属し、その他の石器は縄文時代に属すると考えられる。縄文時代の石器のうち、打製石斧・石匙などの石材の多くは遺跡の近隣の瀬戸川水系の河川の転礫から採取したものと考えられる。

117は角錐状石器であり、両側縁中央に剥離調整を施している。上下端部を欠損している。

118・119は凹基無茎石鏃である。118は先端部を欠損している。器体中央に厚みを持ち、側縁中央がやや丸みを帯びている。119はやや薄手であり、平面形状は細長い二等辺三角形を呈する。120・121は石鏃未製品である。120は先端部の両側縁に剥離調整を施して三角形状にしている。121は剥片の先端を三角形状に加工しており、右側縁の一部に自然面が残る。

122～127は石匙であり、122～126は横型、127は縦型である。いずれも上部につまみを作り出す。122は弧状に広がる刃部および側縁に剥離調整を施す。123は刃部が平坦である。124は扁平な剥片の下端部および側縁のみに剥離調整を施して刃部を作り出しており、つまみが斜め上部に付けられる。125は全体的に摩耗が激しく、調整痕は残存していない。126は側縁部の破片である。127は両側縁の片面に剥離調整を施しており、左側縁下部および刃部を欠損している。

128・129はスクレイパーである。128は両側縁に原礫面が残り、剥離調整を施す。129は片面に原礫面が残り、両側縁および上下端部に剥離調整を施している。

130～132は打製石斧である。130は短冊形を呈しており、片面中央に原礫面を残し、両側縁に剥離調整を施す。131は分銅形であり、片面に原礫面を大きく残し、両側縁中央部に剥離調整を施す。132は撥形を呈しており、両側縁および刃部に剥離調整を施す。上端部左側縁付近には原礫面が残る。

133・134は敲石、135は凹石である。133はやや厚みのある円礫の両面中央に敲打痕が残る。134は厚みのある角礫の片面を敲打することにより平坦な面が生じている。135は扁平な長方形に近い角礫の片面を敲いており、中央部に数箇所の凹みが生じている。

第３表　花倉大柳遺跡出土縄文土器一覧

図版番号	写真図版番号	挿図番号	グリッド	遺構	層　位	型　式	胎　土	焼成	色　調	器厚（cm）	備　考
第12図	11上	1	B−12	SK72	裏込め土層	北裏C併行	密（石英や白色、灰色などの砂粒を含む）	良	内面：7.5YR6/6橙 外面：7.5YR4/4褐	上部：0.65 下部：0.75	本調査2面
第12図	11上	2	B−12	SK72	裏込め土層	北裏C併行	密（石英や白色、灰色などの砂粒を含む）	良	内面：7.5YR6/6橙 外面：7.5YR4/4褐	上部：0.6 下部：0.75	本調査2面
第16図	11下	8	B−11		Ⅳ−3層	押型文	密（石英や白色砂粒を含む）	良	内面：5YR5/6明赤褐 外面：10YR4/4褐	上部：0.8 下部：0.85	本調査2面
第16図	11下	9	B−11/C−11		Ⅳ−2・3層	田戸下層	密（長石や雲母などを含む）	良	内面：7.5YR5/6明褐 外面：5YR5/6明赤褐	上部：0.65 下部：0.65	本調査2面
第16図	11下	10			黒色土層	鷹島	密（石英や2〜3mmの灰色などの砂粒を含む）	良	内面：10YR4/3にぶい黄褐 外面：10YR7/4にぶい黄橙	上部：0.45 下部：0.55	本調査1面
第16図	11下	11	C−6		5層	鷹島	密（白色、茶色の砂粒を含む）	良	内面：10YR4/3にぶい黄褐 外面：10YR8/4浅黄橙	上部：0.4 下部：0.4	本調査2面
第16図	11下	12	C−6		Ⅵ層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内面：7.5YR6/6橙 外面：7.5YR5/4にぶい褐	上部：0.6 下部：0.55	本調査2面
第16図	11下	13	C−6		5層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内外面：10YR7/4にぶい黄橙	上部：0.7 下部：0.45	本調査2面
第16図	11下	14	C−6		Ⅵ層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内面：7.5YR5/6明褐 外面：5YR6/4にぶい橙	口縁部：1.0 下部：0.3	本調査2面
第16図	11下	15	D−7		Ⅵ層	北裏C	密（長石や石英などを含む）	良	内外面：5YR6/4にぶい橙	口縁部：0.3 下部：0.6	本調査2面
第16図	11下	16	C−11			北裏C	密	良	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	上部：0.1 下部：0.7	本調査1面
第16図	11下	17	C−11		Ⅳ−2層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：7.5YR5/4にぶい褐	口縁部：0.2 下部：0.4	本調査2面
第16図	11下	18	B−11		Ⅳ−1層	北裏C	密（石英や白色砂粒などを含む）	良	内面：7.5YR3/2黒褐 外面：5YR4/6赤褐	上部：0.75 下部：0.4	本調査2面
第16図	11下	19	E−8		縄文包含層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内面：10YR5/3にぶい黄褐 外面：7.5YR7/6橙	上部：0.8 下部：0.6	本調査1面
第16図	11下	20			黒色土層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内外面：7.5YR4/3褐	上部：0.8 下部：0.4	本調査1面
第16図	11下	21	西谷部		8層？	北裏C？	密（石英や雲母を含む）	良	内面：10YR5/3にぶい黄褐 外面：10YR6/4にぶい黄橙	上部：0.5 下部：0.55	本調査2面
第16図	11下	22	C−11		Ⅳ−2層	北裏C	密（石英や赤色砂粒を含む）	良	内外面：5YR5/4にぶい赤褐	上部：0.7 下部：0.9	本調査2面
第16図	11下	23	3・6T交差部		Ⅳ−2層	北裏C	密（石英や雲母などを含む）	良	内外面：7.5YR6/6橙	上部：0.65 下部：0.45	本調査2面
第16図	11下	24	C−6		Ⅵ層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内面：5YR6/6橙 外面：5YR4/4にぶい赤褐	上部：0.6 下部：0.5	本調査2面
第16図	11下	25			黒色土（3層）下層	北裏C	密（石英や雲母を含む）	良	内面：7.5YR6/6橙 外面：7.5YR3/3暗褐	上部：0.45 下部：0.6	確認調査
第16図	12上	26	C−6		5層	北裏C	密（石英を多く含む）	良	内外面：7.5YR5/6明褐	口縁部：0.4 下部：0.5	本調査2面
第16図	12上	27	C−11		Ⅳ−3層	北裏C	密（石英などを含む）	良	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：5YR4/4にぶい赤褐	上部：0.4 下部：0.55	本調査2面
第16図	12上	28	C−6		5層	北裏C？	密（石英や長石を含む）	良	内外面：10YR7/3にぶい黄橙	上部：0.4 下部：0.6	本調査2面
第16図	12上	29	C−11		Ⅳ−3層	北裏C	密（石英や雲母を含む）	良	内面：5YR3/3暗赤褐 外面：5YR4/4にぶい赤褐	上部：0.6 下部：0.5	本調査2面
第16図	12上	30	C−6		5層	北裏C	密（石英や白色、赤色などの砂粒を含む）	良	内外面：10YR6/4にぶい黄橙	上部：0.6 下部：0.5	本調査2面
第16図	12上	31	D−6		6層	北裏C	密（石英などを含む）	良	内面：5YR5/6明赤褐 外面：7.5YR6/4にぶい橙	上部：0.5 下部：0.45	本調査2面
第16図	12上	32	C−7		5層	北裏C	密（石英などを含む）	良	内外面：10YR6/2灰黄褐	上部：0.5 下部：0.5	本調査2面
第16図	12上	33	D−6		6層	北裏C？	密（石英などを含む）	良	内面：10YR5/3にぶい黄褐 外面：10YR6/4にぶい黄橙	上部：0.5 下部：0.9	本調査2面

図版番号	写真図版番号	挿図番号	グリッド	遺構	層　位	型　式	胎　土	焼成	色　調	器厚（cm）	備　考
第16図	12上	34			表採	北裏C	密(5mm以下の灰色などの砂粒や雲母を含む)	良	内面:7.5YR5/8明褐 外面:7.5YR4/4褐	上部:0.5 下部:0.7	本調査1面
第16図	12上	35			黒色土層	北裏C	密(石英や灰色などの砂粒を含む)	良	内外面:7.5YR5/6明褐	上部:0.6 下部:0.6	本調査1面
第16図	12上	36	C−6		6層	北裏C	密(石英などを含む)	良	内面:7.5YR5/4にぶい褐 外面:7.5YR6/4にぶい橙	上部:0.4 下部:0.7	本調査2面
第16図	12上	37	C−7		5層	北裏C	密(石英などを含む。9mm位の礫含む)	良	内外面:10YR7/4にぶい黄橙	上部:0.65 下部:0.45	本調査2面
第16図	12上	38			Ⅳ−1上層	北裏C	密(石英を多く含む)	良	内外面:5YR5/6明赤褐	口縁部:1.1 下部:0.8	本調査2面
第16図	12上	39	3･6T交差部		黒色土(Ⅲ層)直下層	北裏C	密(石英や長石を含む)	良	内面:10YR7/6明黄褐 外面:5YR5/6明赤褐	上部:0.7 下部:0.6	確認調査
第16図	12上	40	C−10		Ⅳ−2層	北裏C	密(石英や赤色などの砂粒を含む)	良	内面:7.5YR7/4にぶい橙 外面:7.5YR4/4褐	上部:0.8 下部:0.55	本調査2面
第16図	12上	41			Ⅳ−1上層	北裏C	密(石英を多く含む)	良	内面:5YR7/6橙 外面:5YR4/3にぶい赤褐	上部:0.7 下部:0.75	本調査2面
第16図	12上	42	D−7		6層	北裏C併行	密(橙色や灰色などの砂粒を含む)	良	内外面:5YR4/6赤褐	上部:0.6 下部:0.55	本調査2面
第16図	12上	43	D−6		6層	北裏C？	密(石英や赤色砂粒を含む)	良	内面:10YR6/4にぶい黄橙 外面:7.5YR6/4にぶい橙	上部:0.65 下部:0.7	本調査2面
第16図	12下	44	B−12		包含層	北屋敷	密(石英を多く含む)	良	内外面:10YR7/4にぶい黄橙	上部:0.4 下部:0.5	本調査2面
第16図	12下	45	C−13		Ⅳ−2層	北屋敷	密(白色や灰色などの砂粒を含む)	良	内外面:7.5YR4/1褐灰	上部:0.6 下部:0.3	本調査2面
第16図	12下	46	D−7		Ⅵ層	北裏C以後	密(石英や赤色などの砂粒を含む)	良	内面:5YR5/4にぶい赤褐 外面:5YR6/4にぶい橙	上部:0.45 下部:0.7	本調査2面
第16図	12下	47	27T		5層	北裏C	密(4mm程の茶色の砂粒や石英、雲母を含む)	良	内面:5YR5/6明赤褐 外面:2.5YR5/6明赤褐	口縁部:1.1 下部:0.6	確認調査
第16図	12下	48			Ⅳ−1上層	中期前半	密(石英や雲母を含む)	良	内面:10YR7/4にぶい黄橙 外面:10YR5/3にぶい黄褐	上部:0.4 下部:0.4	本調査2面
第16図	12下	49	D−7		6層	狢沢	密(石英を含む)	良	内面:5YR6/4にぶい橙 外面:5YR3/4赤褐	上部:0.6 下部:0.8	本調査2面
第16図	12下	50	D−6		5層	狢沢	密(石英を含む)	良	内外面:5YR3/6暗赤褐	上部:0.7 下部:0.75	本調査2面
第16図	12下	51	C−6		5層	勝坂	密(石英や雲母を含む)	良	内面:7.5YR6/4にぶい橙 外面:5YR5/6明赤褐	上部:1.05 下部:0.65	本調査2面
第16図	12下	52			黒色土層	勝坂	密(石英や黒色砂粒を含む)	良	内面:7.5YR7/4にぶい橙 外面:5YR4/8赤褐	上部:1.1 下部:1.1	本調査1面
第16図	12下	53			黒色土層	勝坂	密(石英などを含む)	良	内面:7.5YR3/4暗褐 外面:5YR5/8暗赤褐	上部:0.65 下部:0.8	本調査1面
第16図	12下	54	C−6		5層	勝坂	密(石英や雲母を含む)	良	内面:7.5YR5/4にぶい褐 外面:7.5YR5/6明褐	上部:1.6 下部:0.7	本調査2面
第16図	12下	55	B−10		Ⅳ−1層	勝坂	密(石英や雲母を含む)	良	内面:7.5YR5/4にぶい褐 外面:7.5YR5/6明褐	上部:0.75 下部:0.8	本調査2面
第17図	13上	56			黒色土層	勝坂併行	密(石英や黒色砂粒を含む)	良	内外面:10YR7/4にぶい黄橙	口縁部？:1.0 下部:1.3	本調査1面
第17図	13上	57	2T		黒色土(3層)下層	曽利Ⅱ	密(石英や黒色などの砂粒を含む)	良	内外面:7.5YR6/4にぶい橙	上部:1.0 下部:0.6	確認調査
第17図	13上	58	C−10		覆土一括	曽利Ⅱ	密(白色などの砂粒を含む)	良	内面:7.5YR5/3にぶい褐 外面:5YR6/8橙	上部:1.0 下部:1.05	本調査2面
第17図	13上	59	B−10		Ⅳ−1層	曽利Ⅱ？	密(白色砂粒や石英を含む)	良	内外面:7.5YR6/6橙	上部:0.9 下部:1.1	本調査2面
第17図	13上	60	A11			曽利Ⅲ	密(長石や石英、灰色などの砂粒を含む)	良	表:裏:5YR6/8橙	上部:3.1 下部:1.6	本調査1面
第17図	13上	61	B−11		Ⅳ−1下層	曽利Ⅱまたは唐草文系	密(石英や雲母を含む)	良	表:裏:10YR3/1黒褐		本調査2面
第17図	13上	62			Ⅳ−1上層	中期後葉	密(石英や雲母を含む)	良	内面:5YR4/4にぶい赤褐 外面:5YR3/4暗赤褐	上部:0.7 下部:0.9	本調査2面

図版番号	写真図版番号	挿図番号	グリッド	遺構	層位	型式	胎土	焼成	色調	器厚（cm）	備考
第17図	13上	63	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内面：7.5YR4/2灰褐 外面：7.5YR6/4にぶい橙	上部：0.4 下部：0.4	本調査2面
第17図	13上	64	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英や長石を含む）	良	内面：7.5YR5/3にぶい褐 外面：7.5YR6/4にぶい橙	上部：0.4 下部：0.4	本調査2面
第17図	13上	65	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内面：10YR6/4にぶい黄橙 外面：7.5YR5/4にぶい褐	上部：0.5 下部：0.4	本調査2面
第17図	13上	66	B-10		Ⅳ-2層	勝坂？	密（雲母や石英を含む）	良	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：5YR4/6赤褐	上部：1.0 下部：1.05	本調査2面
第17図	13上	67	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内面：5YR4/2灰褐 外面：5YR5/4にぶい赤褐	上部：0.4 下部：0.7	本調査2面
第17図	13上	68	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英を含む）	良	内面：10YR4/2灰黄褐 外面：7.5YR4/3褐	上部：0.4 下部：0.5	本調査2面
第17図	13上	69	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：5YR5/3赤褐	上部：0.45 下部：0.45	本調査2面
第17図	13上	70	B-10		Ⅳ-1層	中期	密（石英や灰色などの砂粒を含む）	良	内面：7.5YR6/6橙 外面：7.5YR4/4褐	上部：1.0 下部：0.9	本調査2面
第17図	13上	71	C-6		5層	中期？	密（石英などを含む）	良	内面：10YR6/3にぶい黄橙 外面：10YR4/3にぶい黄褐	上部：0.7 下部：0.7	本調査2面
第17図	13上	72	C-6		5層	中期東海系	密（石英や白色砂粒を含む）	良	内面：10YR6/3にぶい黄橙 外面：7.5YR4/2灰褐	上部：0.55 下部：0.8	本調査2面
第17図	13上	73	B-11		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英や雲母や白色などの砂粒を含む）	良	内外面：5YR3/4暗赤褐	口縁部：0.6 下部：0.3	本調査2面
第17図	13上	74			表採	勝坂	密（石英などを含む）	良	内外面：10YR4/4褐	口縁部：0.6 下部：0.9	本調査1面
第17図	13下	75			Ⅳ-1上層	中期	密（黒色や灰色などの砂粒を含む）	良	内面：5YR2/1黒褐 外面：5YR2/4極暗赤褐	上部：0.8 下部：0.8	本調査2面
第17図	13下	76	西谷部		暗褐色包含層	中期	密（石英や雲母を含む）	良	内面：5YR3/1黒褐 外面：5YR4/6赤褐	上部：0.9 下部：0.85	本調査2面
第17図	13下	77	C-11			不明	密（白色砂粒を含む）	良	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：5YR6/6橙	上部：0.9 下部：1.0	本調査2面
第17図	13下	78	D-6		6層	中期	密（白色砂粒を含む）	良	内面：7.5YR7/4にぶい橙 外面：7.5YR5/2灰褐	上部：1.1 下部：0.65	本調査2面
第17図	13下	79			Ⅳ-1上層	中期東海系	密（石英を多く含む）	良	内外面：5YR5/6明赤褐	上部：0.5 下部：0.65	本調査2面
第17図	13下	80	B-11		Ⅳ-1上層	中期中葉？	密（石英や雲母を含む）	良	内面：5YR3/3暗赤褐 外面：5YR4/6赤褐	上部：0.7 下部：0.7	本調査2面
第17図	13下	81			表採	不明	密（石英などを含む）	良	内面：7.5YR7/4にぶい橙 外面：5YR5/4赤褐	上部：0.4 下部：0.55	本調査2面
第17図	13下	82	D-6		6層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内外面：5YR5/6明赤褐	上部：0.6 下部：0.6	本調査2面
第17図	13下	83	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系？	密（石英などを含む）	良	内面：7.5YR4/2灰褐 外面：7.5YR5/6明褐	上部：0.5 下部：0.45	本調査2面
第17図	13下	84	B-10		Ⅳ-1層	中期中葉東海系	密（石英などを含む）	良	内面：7.5YR4/2灰褐 外面：7.5YR5/6明褐	上部：0.5 下部：0.45	本調査2面
第17図	13下	85	C-11		Ⅳ-2・3層	不明	密（石英を多く含む）	良	内面：7.5YR6/4にぶい橙 外面：7.5YR5/2灰褐	上部：0.5 下部：0.4	本調査2面
第17図	13下	86	D-6		6層	不明	密（石英や白色砂粒を含む）	良	内外面：7.5YR6/6橙	上部：0.9 下部：0.45	本調査2面
第17図	13下	87	B-11		Ⅳ-1上層	中期中葉東海系？	密（長石や石英、雲母を含む）	良	内外面：5YR4/4にぶい褐	底部：0.9 下部：0.6 底径：(11.4)	本調査2面
第17図	13下	88			Ⅳ-1上層	不明	密（黒色や灰色などの砂粒を含む）	良	内面：5YR2/1黒褐 外面：5YR2/4極暗赤褐	上部：0.7 下部：0.8	本調査2面
第17図	13下	89			黒色土（3層）下層	不明	密（石英や5mm大の赤色砂粒などを含む）	良	内面：10YR3/4暗褐 外面：7.5YR5/6明褐	上部：0.7 底部：1.1	確認調査

第４表　花倉大柳遺跡出土弥生～中世土器一覧

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種別	器種	グリッド	遺構	層　位	胎　土	焼成	色　調	残存率	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備考
第25図	14上	90	古式土師器	壺	B-9	SD27	1層	やや粗（灰色や橙色などの砂粒を含む）	良	内外面:7.5YR7/4にぶい橙	頸部～体部上半45%				本調査1面
第25図	14上	91	古式土師器	壺	B-9	SD27	1・2層	やや粗（5mm以下の砂粒を多く含む）	良	内面:10YR7/4にぶい黄橙 外面:7.5YR7/4にぶい橙	底部60%		6.2		本調査1面
第27図	14下	92	古式土師器	高坏	B-10	SD03	最下層	密（灰色や橙色などの砂粒を含む）	良	内外面:7.5YR8/4浅黄橙	脚部？20%				本調査2面
第27図	14下	93	古式土師器	壺	B-10	SD03	黒色土下層	やや粗（8mm以下の茶色、灰色などの砂粒を含む）	良	内外面:7.5YR7/8黄橙	口縁部20%	(14.7)			本調査1面
第27図	14下	94	古式土師器	壺	A-11	SD03	黒色土下層	やや粗（6mm以下の灰色や赤色、白色などの砂粒を含む）	良	内面:10YR7/4にぶい黄橙 外面:5YR7/6橙	底部15%		(9.4)		本調査1面
第27図	14下	95	古式土師器	壺	B-10	SD03	埋土上・黒色土下層	密（白色や灰色などの砂粒を含む）	良	内外面:10YR7/6明黄褐	底部45%		(7.7)		本調査1.2面
第27図	14下	96	古式土師器	甕	B-9	SD03	4層・最下層	やや粗（5mm以下の茶色や灰色などの砂粒を含む）	良	内外面:10YR7/4にぶい黄橙	1%				本調査1面
第34図	10 15上	98	須恵器	坏蓋	B-11	SD02	1層	密（白色砂粒を含む）	良	内面:5B5/1青灰 外面:5R6/1赤灰	99%	13.4		5.05	本調査1面
第34図	10 15上	99	須恵器	坏蓋	B-11	SD02	1層	密（5mm以下の長石や石英、白色砂粒を含む）	良	内外面:5Y6/1灰	98%	15.25		4.9	本調査1面
第34図	10 15上	100	須恵器	坏身	B-11	SD02	1層（黒色土）上層	密（5mm大の小礫や白色粒を含む）	良	内面:5Y6/1灰 外面:2.5Y5/1黄灰	45%	(15.3) 最大径(17.6)		3.2	本調査1面
第34図	10 15上	101	須恵器	坏身	B-11	SD02	1層	密（7mm大の長石や白色砂粒を含む）	良	内外面:5Y6/1灰	98%	13.4 最大径16.05		4.95	本調査1面
第36図	10	102	灰釉陶器	長頸瓶	C-9	SD33	包含層	密（4～5mmの長石や白色砂粒を含む）	良	内面:2.5Y6/1黄灰 外面:2.5Y7/3浅黄	底部～体部下半80%		7.0		本調査1.2面
第39図	15下	103	古式土師器	壺	3・6T 再掘削			やや粗（1mm位の砂粒や石英を含む）	良	内外面:5YR7/6橙	1%				本調査1面
第39図	15下	104	古式土師器	壺	7T 拡張部		にぶい黄褐色粘土層	密（9mm以下の茶色の砂粒や白色砂粒を含む）	良	内面:10YR7/4にぶい黄橙 外面:7.5YR7/6橙	頸部～肩部30%				確認調査
第39図	15下	105	古式土師器	壺	1T 拡張部		黒色土上層	密（灰色や橙色などの砂粒を含む）	良	内面:10YR7/4にぶい黄橙 外面:7.5YR8/6浅黄橙	底部15%		(10.8)		確認調査
第39図	16上	106	土師器	坏身	1・3・6T 再掘削			密（石英や雲母を含む）	良	内面:5YR6/6橙 外面:5YR6/8橙	35%	(13.6)	(4.2)	4.75	本調査1面
第39図	16上	107	土師器	坏身			黒色土層	密（3mm以下の白色、灰色などの砂粒を含む）	良	内外面:5YR6/8橙	30%	(13.8)	(3.6)	4.34	本調査1面
第39図	16上	108	土師器	坏身	B-11		1層一括	密（白色砂粒などを含む）	良	内面:7.5YR6/8橙 外面:7.5YR7/6橙	25%	(13.8)	(5.6)	4.6	本調査1面
第39図	16上	109	土師器	坏身			黒色土層	密（雲母や灰色などの砂粒を含む）	良	内面:7.5YR7/6橙 外面:5YR6/8橙	20%		(5.0)		本調査1面
第39図	16上	110	土師器	坏身	1・6T 再掘削			密（石英や雲母を含む）	良	内外面:5YR7/8橙	底部25%		(6.1)		本調査1面
第39図	16下	111	須恵器	坏身	22・23T 拡張部		表土層	密（白色粒子を含む）	良	内外面2.5Y7/2灰黄	底部40%		(11.5)		確認調査
第39図	16下	112	灰釉陶器	碗	26T 付近		廃土	密（白色粒子を含む）	良	内面:5Y8/1灰白色 外面:10YR7/2にぶい黄橙	底部15%		(8.4)		確認調査
第39図	16下	113	山茶碗	小皿	23T 付近		廃土	密（白色粒子を含む）	良	内外面:10YR7/2にぶい黄橙	底部50%		(4.9)		確認調査
第39図	16下	114	灰釉陶器	碗	27T 拡張部		3層（黒褐色土）	密（白色粒子を含む）	良	内外面:2.5Y7/3浅黄	底部30%		(5.2)		確認調査
第39図	16下	115	灰釉陶器	長頸瓶			3層	密（2mm以下の白色砂粒を含む）	良	内外面2.5Y6/2灰黄	底部99%		7.2		確認調査
第39図	10	116	土師器	坏身	D-6		包含層	密（4mm以下の赤色砂粒や白色粒子を含む）	良	内外面:7.5YR8/8黄橙	95%	10.8	4.3	2.95	本調査1面

第5表　花倉大柳遺跡出土石器一覧

図版番号	写真図版番号	挿図番号	器　種	グリッド	遺構	層　位	石　材	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
第12図	11上	3	砥石	B-12	SK72	裏込め土層	凝灰質砂岩	(9.1)	(9.15)	6.8	(718.2)	本調査2面
第12図	11上	4	礫器	B-12	SK72	覆土下部層	淡黄灰色中粒砂岩	11.6	14.58	3.9	741.1	本調査2面
第12図	11上	5	石皿	B-12	SK72	覆土下部層	凝灰質砂岩	(20.32)	(20.05)	(4.8)	(1,500)	本調査2面
第13図	11上	6	石皿	B-12	SK72	覆土上部	凝灰質砂岩	(26.4)	(22.7)	(4.4)	(3,000)	本調査2面
第13図	11上	7	石皿	B-12	SK72		凝灰質砂岩	(31.69)	(23.9)	(12.2)	(10,000)	本調査2面
第29図	18上	97	打製石斧	C-10	SD36		灰～黒色粘板岩	6.82	4.18	1.4	42.2	本調査1面
第40図	17上	117	角錐状石器	B-11		IV-2層	暗灰色チャート	3.64	3.59	1.7	20.6	本調査2面
第40図	17上	118	石鏃	B-12			淡灰色チャート	(1.94)	1.65	0.4	(0.9)	本調査2面
第40図	17上	119	石鏃	D-7		VI層	淡黄灰色珪質頁岩	2.27	1.55	0.3	0.6	本調査2面
第40図	17上	120	石鏃未製品	B-13		地山直上	淡黄灰色珪質頁岩	3.47	1.98	0.72	4.5	本調査2面
第40図	17上	121	石鏃未製品	B-11		IV-1下層	灰色砂質粘板岩	4.32	3.38	0.8	9.0	本調査2面
第40図	17下	122	石匙	3・6T交差部		黒色土(旧層)直下層	淡黄灰色チャート	3.7	4.92	0.9	10.6	確認調査
第40図	17下	123	石匙	B-9		撹乱	淡褐色～黒色珪質頁岩	4.28	5.9	1.35	21.4	本調査1面
第40図	17下	124	石匙	C-6		VI層	淡黄灰色～灰色珪質凝灰岩	3.75	6.25	1.1	16.0	本調査2面
第40図	17下	125	石匙	A-10		IV-1層	淡黄褐～黒色粘板岩	3.5	5.3	1.0	13.6	本調査2面
第41図	17下	126	石匙	3T西端		第5層	淡黄灰色チャート	3.28	2.35	1.1	6.8	確認調査
第41図	17下	127	石匙			IV-2層	淡黄灰色～黒色珪質粘板岩	8.75	4.12	1.55	43.9	本調査2面
第41図	17下	128	スクレイパー	C-11		IV-2層	淡灰色珪質頁岩	5.8	4.1	1.42	22.8	本調査2面
第41図	17下	129	スクレイパー			黒色土一括	灰色粘板岩	4.22	5.0	0.9	17.3	本調査1面
第41図	18上	130	打製石斧	D-7		中世包含層下面	淡灰色～黒色粘板岩	7.2	3.6	1.25	36.9	本調査1面
第41図	18上	131	打製石斧	B-12			灰色珪質粘板岩	9.31	5.2	1.52	78.6	本調査2面
第41図	18上	132	打製石斧	1T拡張部		黒色土の上層	淡褐灰色中粒砂岩	11.44	7.08	3.32	200.1	確認調査
第42図	18下	133	敲石	2?T最掘削			凝灰質砂岩	8.82	(7.05)	5.25	(343.6)	本調査1面
第42図	18下	134	敲石	1・6T最掘削			暗褐色凝灰質中粒砂岩	(10.1)	(8.7)	(9.6)	(795.8)	本調査1面
第42図	18下	135	凹石			IV-2層？	灰褐色含礫層状粗粒砂岩	(18.5)	(10.16)	(5.28)	(1,000)	本調査2面

第３節　花倉大柳古墳の調査成果

１　墳丘と周溝（第43図）

花倉大柳古墳は、花倉大柳遺跡調査区中央部のＡ７・８グリッドからＢ７・８グリッドにかけての南東に延びる丘陵尾根の南を望む先端部に位置しており、発掘調査前においてもドーム状の高まりが認められた。墳丘の平面形は円形であり、規模は直径約16mと推定される。尾根の基部にあたる北東側を幅１～３m程度の浅い溝状に削り込んで墳丘を区画し、これより東西では、わずかに地山を削り出して、傾斜を急にして墳丘裾を作り出している。南側は急斜面になっており、地山の整形は認められなかった。墳丘は地山直上に厚さ10～30㎝程度の耕作土が乗るのみで盛土は確認されなかった。

墳丘裾の北東側では、墳丘上から流れ込んで周溝状の削り出しに堆積した暗褐色土に伴って土師器の破片がまとまって出土しており、そのうち２点を図化している（第46図138・139）。出土状況から、墳丘上に何らかの祭祀にともなって置かれたものが、墳丘上の封土・盛土と共に墳丘裾に流れ込んだものと考えられる。

２　埋葬施設

埋葬施設は墳丘のほぼ中央で１基検出している。木棺直葬であり、主軸方向はＮ－15°－Ｗである。検出面は現状の地山の地形に合わせたため、中央から南北に向かって下がっている。

⑴　墓壙（第44図）

墓壙は、黄褐色の岩盤である地山に直接掘り込まれており、周辺には茶木の根の撹乱が激しく入っている。平面形は南北に細長い長方形を呈しており、検出長は約6.７m、検出幅は2.０～2.３m程度である。墓壙は二段墓壙であり、底面は皿状に掘り込まれている。中央部東寄りには木棺を安定させるための掘り込みが認められる。掘り込みの検出長は約5.２m、検出幅は40～60㎝、深さは10～15㎝である。

墓壙覆土には、墓壙を掘削した際に生じたと思われる岩盤破砕小礫を大量に含む黄褐色土（第44図10層）を用いており、覆土は堅固に締まっている。地山土と墓壙覆土の判別は目視ではほぼ不可能であったが、削ると周辺が堅い岩盤の地山に対して、墓壙覆土は岩盤より柔らかく、細かい小礫が混じり、若干濁った色調をもっていたため、地山と墓壙覆土を区別することができた。

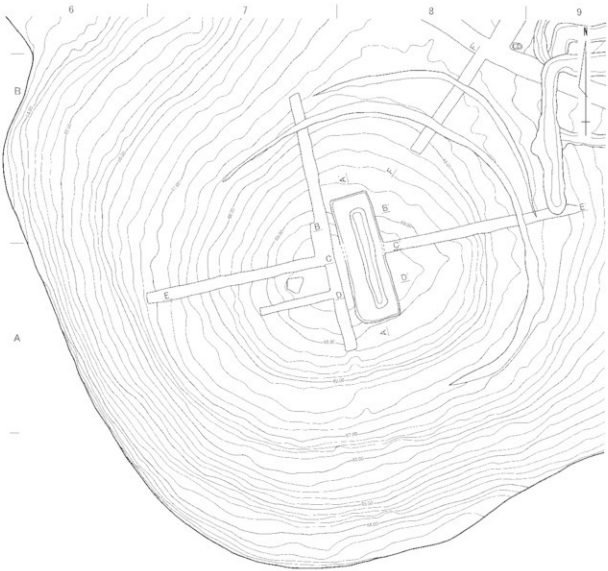
⑵　木棺（第45図）

木棺は墓壙のほぼ中央に位置しており、墓壙肩部から約５～20㎝の深さで検出面を確認している。棺の長さは推定４m程度であり、検出幅は上端で約70㎝、下端で30～40㎝程度である。

木棺掘方最下層には、地山掘り抜き土であるしまりが非常に強い粘質土（第44図５層）がおよそ５㎝の厚さで均等に轢かれていた。掘方底面の凹凸が均されるように、上面が平坦になっており、木棺を安定させるために敷かれた棺床土と考えられる。この棺床土の底部断面はやや丸みをもっており、側面は曲線を描きながら立ち上がっている。また、これに沿って続く木棺の壁面もほぼ直線的に斜め上方へ立ち上がっている。このことから木棺は丸底の割竹形木棺であったと推定される。

棺内には棺材は残っておらず、にぶい黄褐色土（第44図３～４層）が堆積しており、木棺の腐朽に伴う陥没によって、木棺封土などが落ち込んだものと考えられる。棺の上部構造は明らかにできなかった。

木棺の南北小口の覆土は木棺内覆土と異なり、しまりが強く礫が少ない土であった（第44図11～13層）が、根の撹乱が下層にまで及んでいたことから、木棺痕跡の南北の立ち上がりを押さえることができず、推定ラインを平面図および土層断面図中に破線で示した（第45図）。

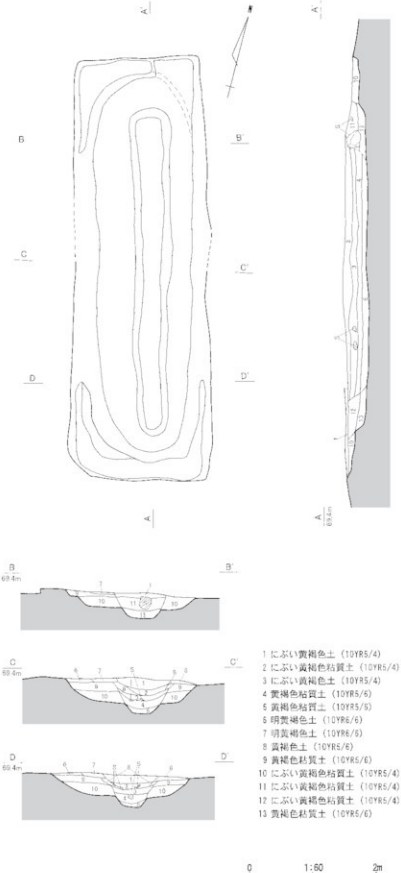


1 表土。撹乱土
2 にぶい黄褐色土（10YR5/4）

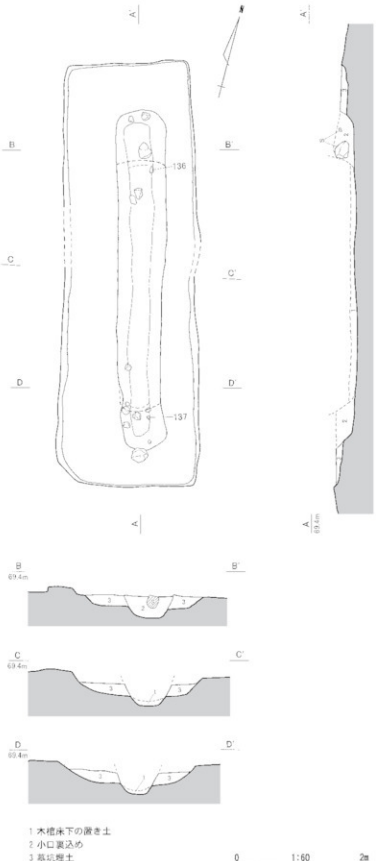
1 耕作土
2 にぶい黄褐色土（10YR5/4）
3 にぶい黄褐色土（10YR5/4）

0　1:200　10m

第43図　墳丘測量図



第44図　主体部掘方完掘状況



第45図　主体部木棺完掘状況

第46図　古墳出土遺物

木棺掘込南北端の底面付近には拳大～人頭大の礫が多く認められ、木棺覆土と裏込め土の境界に沿うように並ぶ礫も存在する。このことから、これらの礫は木棺の南北小口に裏込めされた石であると考えられる。同様の大きさの礫は、木棺側面下端にも認められる。また、木棺内部の覆土にも拳大の礫がかなり含まれており、これらの石が木棺上蓋の上面に積まれていたか、木棺の封じ土に含まれていたものと思われる。

木棺南北両小口の裏込め土、木棺端近くの墓壙覆土と木棺内覆土の上層から土師器の小片がまとまって出土しており、そのうち２点を図化している（第46図136・137）。埋葬施設内の出土遺物は土師器のみであり、木棺内部からの副葬品は出土していない。

3　出土遺物（第46図136～139）

136～139は土師器の壺であり、136・138・139は摩滅のため調整は不明である。136は複合口縁の破片であり、口縁部先端が欠損している。137は頸部がほぼ垂直に立ち上がり、外面に縦方向のハケ調整、内面に横方向のハケ調整を施す。138は口縁部がわずかに外反しながら短く直立する。139は底部の破片である。

第６表　花倉大柳古墳出土土器一覧

図版番号	写真図版番号	挿図番号	種別	器種	グリッド	遺構	層位	胎土	焼成	色調	残存率	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	備考
第46図	21下	136	土師器	壺		木棺内北端	床面直上	密（7mm位の砂粒や白色、橙色などの砂粒を含む）	良	内面：7.5YR8/4浅黄橙 外面：7.5YR8/8黄橙	1%				本調査1面
第46図	21下	137	土師器	壺		木棺内南端	床面直上	密（3mm以下の赤色の砂粒や石英を含む）	良	内面：10YR7/4にぶい黄橙 外面：5YR7/6橙	1%				本調査1面
第46図	21下	138	土師器	壺	B-8	北東墳丘断	下層	密（6mm以下の砂粒や石英などを含む）	良	内面：2.5Y7/4浅黄 外面：10YR7/4にぶい黄橙	口縁部30%	（12.5）			本調査1面
第46図	21下	139	土師器	壺？	A-9	周溝・東墳丘断	埋土中	やや粗（3～4mmの橙色などの砂粒を含む）	良	内面：10YR8/6黄橙 外面：7.5YR8/6浅黄橙	底部40%		（5.6）		本調査1面

第４章　まとめ

第１節　花倉大柳遺跡について

１　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、調査区東谷部で竪穴住居跡（SH71）と石囲炉（SK72）を検出した。

東谷部北東端で検出した石囲炉（SK72）は出土遺物から中期前葉に属すると考えられる。縄文時代中期の石囲炉は、志太地域では萩ヶ谷遺跡や荘館山遺跡などで発見されている（藤枝市教育委員会・静岡大学考古学研究室2002）。荘館山遺跡では、古墳墳丘盛土の下から縄文時代中期後半と思われる石囲炉を検出しており、中期後半の竪穴住居の存在が想定されている。また、萩ヶ谷遺跡においても中期後半の石囲炉を伴う竪穴住居跡を検出している。一方、今回の調査で検出された石囲炉は、周囲に住居跡の痕跡が確認されておらず、屋外炉である可能性も考えられる。

包含層出土の縄文土器は、北裏C式、北屋敷式、曽利Ⅱ式など、縄文時代中期前葉～中葉の土器が主体となっており、東谷部で検出された竪穴住居跡（SH71）についても、周辺の出土遺物から中期前葉頃に属する可能性が高い。

２　弥生時代後期～古墳時代前期の遺構と遺物

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構は、中央丘陵部東斜面から東谷部東端にかけて竪穴住居跡５棟（SH60、SD30・50－2、SD31、SH01、SH37）と方形周溝墓３基（SD26・28・29、SD27、SD03）を検出した。このうち、第２面の調査区東端で検出した楕円形の住居（SH60）が最も古く、続いて中央丘陵部東斜面の楕円形～隅丸方形を呈する住居（SD30・50－2、31）が建てられていると考えられる。これらの住居は、その形状から弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭に属する可能性が高い。

中央丘陵部東斜面では、住居跡であるSD31を方形周溝墓の周溝であるSD27が切っており、住居群に引き続いて方形周溝墓群が築かれていると考えられる。SD26・28・29を破壊した後にSD27が構築されており、これら２基の方形周溝墓の造営には時期差が存在する可能性が高い。一方、SD27とSD03については、遺構の形状や方向が同一である点からほぼ同時期に属する可能性が高いと考えられる。

調査区東端部で検出された住居（SH01・SH37）は、中央丘陵部東斜面にかけて位置する住居（SD30・31・50－2）と比較すると、平面形状が方形に近い点からより新しい時期の住居と考えられ、SD03・SD27などの方形周溝墓とほぼ同時期に属する可能性が考えられる。

志太地域では、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭にかけて、荘館山遺跡、白砂ヶ谷遺跡、蛭ヶ谷遺跡、萩ヶ谷遺跡など、丘陵上に数多くの住居が営まれる遺跡が知られており、葉梨川流域でも東浦遺跡などで方形周溝墓や住居跡が検出されている。また、瀬戸川流域の白砂ヶ谷遺跡では、集落の後に方形周溝墓が営まれる時期的な変遷が確認されている（藤枝市埋蔵文化財調査事務所1980）。花倉大柳遺跡では出土遺物が少なく詳細な時期が特定できないものの、これらの遺跡と同様に、集落に引き続いて方形周溝墓が造営される展開を確認することができた。

３　古墳時代後期の遺構と遺物

古墳時代後期の遺構には、東谷部で検出した円形周溝（SD02）がある。主体部が後世の削平により検出できなかったものの、周溝の形状と出土遺物から後期前半の円墳である可能性が考えられ、葉梨川中流域では調査事例が少なく注目される。葉梨川の支流である半谷川を挟んで東側の丘陵部に位置する衣原11号墳・衣原１号窯でもほぼ同時期に相当する須恵器が出土しており（静岡県埋蔵文化財調査研究所2010）、これらの遺跡との関連についても今後の検討課題となると思われる。

４　古代以降の遺構と遺物

古代以降の遺構として、中央丘陵部東斜面で溝状遺構１基（SD33）と土坑１基（SK32）を検出し、調査区西端では窯状遺構（SX45）とそれに隣接する土坑１基（SK44）を検出した。

SD33は溝が途切れずにほぼ方形に巡っており、９世紀後半の灰釉陶器長頸瓶（第36図102）が出土していることから、平安時代前期の方形周溝状遺構と考えられる。同様の形状を持つ遺構は、瀬戸川流域の丘陵上に位置する蛭ヶ谷遺跡でも検出されている（藤枝市埋蔵文化財調査事務所1980）。蛭ヶ谷遺跡の方形周溝状遺構からは遺物が出土しておらず年代は不明であるが、弥生時代後期の竪穴住居を破壊しており、周溝が途切れずに方形を呈する点や、南西側で奈良・平安時代の竈を持つ竪穴住居跡２軒が検出されている点から、花倉大柳遺跡の方形周溝状遺構と同様に奈良・平安時代に属する可能性も考えられる。

方形周溝状遺構は、静岡県東部では三島市の田頭山古墳群、長泉町の池田B遺跡、沼津市の秋葉林遺跡等で見つかっている。全国的には千葉県・岩手県等で多くの報告例があり、奈良・平安時代の火葬墓と関連する遺構であると考えられている（栃木県考古学会1995）。花倉大柳遺跡で検出した方形周溝状遺構についてもこれらの例と同様に、火葬墓である可能性が高い。

調査区西端部で検出された窯状遺構（SX45）は、瀬戸川流域の内瀬戸火葬墓群等で類例が発見されている（藤枝市教育委員会1981）。これらの窯状遺構は、長軸が５～６ｍの細長い小判形に掘り込まれており、主軸方向に細い溝を有する。床面中央に木材による枠組みが施され、床面や壁面が焼けており、火葬に関連する遺構と考えられている（八木1992）。花倉大柳遺跡で検出した窯状遺構についても内瀬戸火葬墓群の例と同様の性格を持つ遺構であると考えられ、古代以降の火葬遺構もしくは炭窯跡である可能性が考えられる。

SK32・SK44は土坑の壁面が焼けており、内部に炭化物が詰まっている点から、火を使用する行為に伴う遺構であると考えられる。内瀬戸火葬墓群においても同様の遺構が検出されており、奈良・平安時代の火葬墓の下部施設に相当する焼壁土坑と考えられ、窯状遺構との関連が想定されている。花倉大柳遺跡で検出されたSK32・SK44についてもこの焼壁土坑に類似する土坑であると考えられるが、火葬骨や蔵骨器などの遺物が出土しておらず、火葬墓と断定する根拠には乏しい。SK44は隣接する窯状遺構（SX45）に関連する遺構と思われ、SK32も古代以降の窯跡に関連する遺構である可能性が考えられる。

第２節　花倉大柳古墳について

花倉大柳古墳は花倉大柳遺跡の中央丘陵部南側の独立丘陵上で単独に立地する直径約16ｍの円墳である。墳丘に盛土は認められず、尾根の基部に相当する北東側を削り込んで墳丘を区画している。南側の急斜面には地山の整形が認められず、茶畑の段造成によって削平されたか、自然地形の状態を活かして地山整形を行わなかったものと推測される。

埋葬施設は木棺直葬である。木棺は割竹形木棺であり、南北の小口と裏込め土の周囲に拳大の礫が含

まれている。裏込め土・埋土の最上層から土師器片が出土しており、墓壙がほぼ埋まりきった段階に置かれたものと考えられる。これらの土師器片は墳丘の祭祀に伴うものと考えられ、木棺を納めて蓋を被せ、墓壙が埋土でほぼ埋まりきった段階で、土師器片を墓壙上に置く副葬行為を復元することができる。

木棺内の副葬品は全く見られず、古墳の年代を把握する手がかりは非常に乏しい。しかし、古墳への割竹形木棺の採用は前期後葉から中期前葉を中心に行われており、その中でも古墳が丘陵上に単独で立地する点や、木棺上に土器を副葬していると見られる点からは、築造時期が前期後葉頃に位置づけられる可能性が推測される。同様の古墳は仮宿沢渡遺跡や若王子古墳などにも見られ、志太地域に典型的に見られる木棺直葬墳の一つと考えられる。

参考文献

静岡県埋蔵文化財調査研究所2000『池田B遺跡　平成11年度東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第122集

静岡県埋蔵文化財調査研究所2004「弥生～古墳時代の継起的集落・墓域―第二東名No.84地点遺跡―」『静岡県埋蔵文化財調査研究所年報20（平成15年度事業概要）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所2004『田頭山古墳群　平成14・15年度　東駿河湾環状道路建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第146集

静岡県埋蔵文化財調査研究所2010『駿河山遺跡Ⅱ（縄文時代編　第１分冊・第２分冊）』静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第212集

静岡県埋蔵文化財調査研究所2010『駿河山遺跡Ⅲ（弥生・古墳・歴史時代編１）』静岡県埋蔵文化財研究所調査報告第213集

静岡県埋蔵文化財調査研究所2010『衣原古墳群・衣原遺跡・衣原古窯跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第214集

静岡県埋蔵文化財調査研究所2010『秋葉林遺跡Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第216集

静岡県埋蔵文化財調査研究所2011『助宗古窯群・寺島大谷遺跡・寺島大谷古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第243集

滝沢誠2003「志太平野における古墳時代前・中期の小型墳」『焼津市史研究』第４号

栃木県考古学会1995『第５会東日本埋蔵文化財研究会　東日本における奈良・平安時代の墓制―墓制をめぐる諸問題』

藤枝市2007『藤枝市史』資料編１　考古

藤枝市2010『藤枝市史』通史編上　原始・古代・中世

藤枝市教育委員会1981『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ―奈良時代～近世編―』

藤枝市教育委員会1995『藤枝市文化財分布地図』

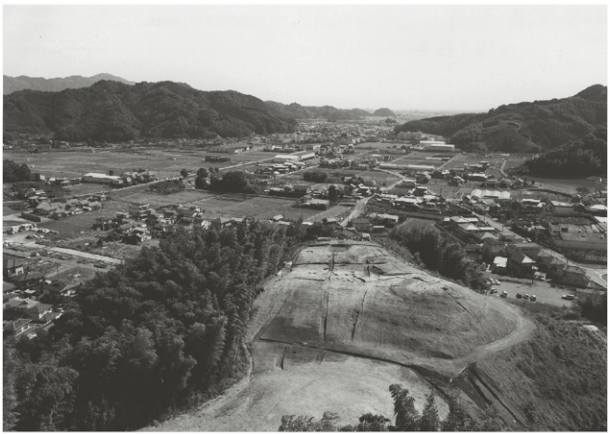
藤枝市教育委員会・静岡大学考古学研究室2002『静岡県藤枝市荘館山１・２号墳発掘調査報告書―平成11・12年度―』

藤枝市埋蔵文化財調査事務所1980『国道１号藤枝バイパス（藤枝地区）埋蔵文化財発掘調査報告書第２冊　蛭ヶ谷遺跡　荘館山遺跡　白砂ヶ谷遺跡』建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・藤枝市教育委員会

浜松市教育委員会2004『有玉古窯』

八木勝行1992「静岡県における火葬墳墓について」『静岡県史研究』第８号

写　真　図　版



遺跡遠景（西より）

遺跡遠景（南西より）

図版2

第１面全景（東より）

第２面全景（東より）

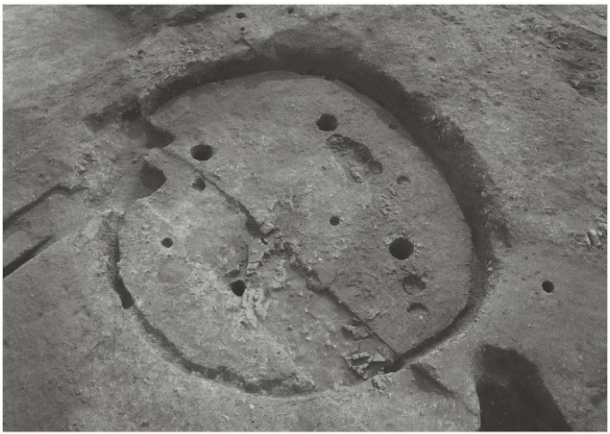
西谷部全景（南東より）

SH71完掘状況（北より）

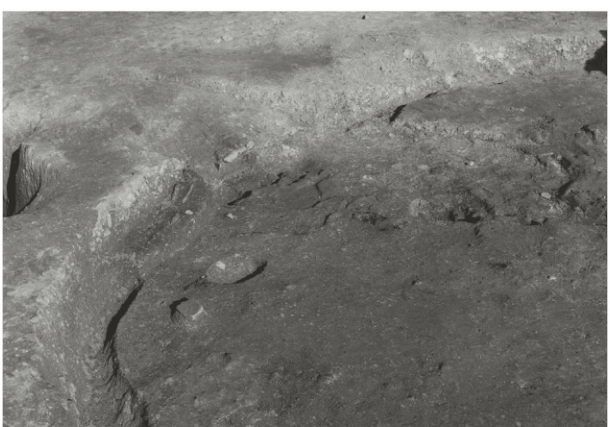
図版4

SK72第１面検出状況（南東より）

SK72第２面検出状況（南東より）



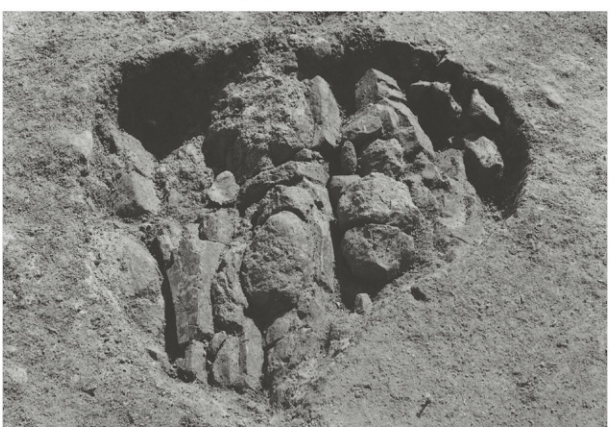
SH60完掘状況（北西より）



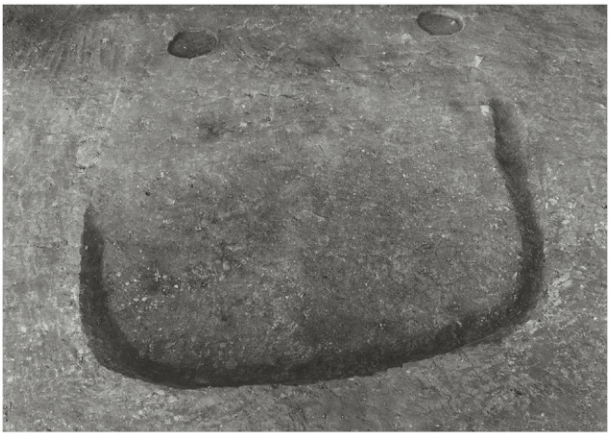
SH60炭化物検出状況（南より）

図版6

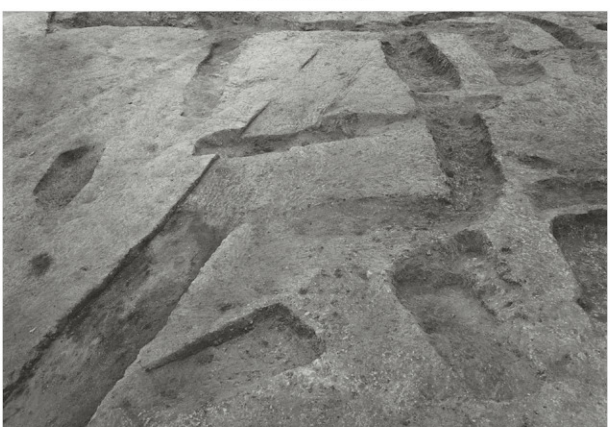
SH60炉跡検出状況（北より）



SH60K1検出状況（北西より）



SH01検出状況（南より）



SD26・27完掘状況（東より）

図版8

SD03完掘状況（東より）

SD02完掘状況（南より）

SD02遺物出土状況（南より）

SX45検出状況（南東より）

図版10

98

99

100

101

102

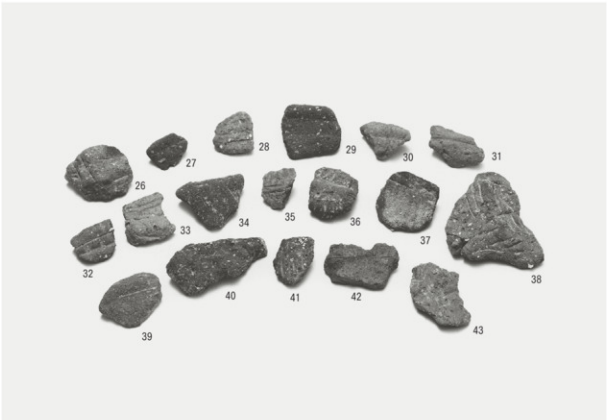
116

SD02・SD33・遺構外出土遺物

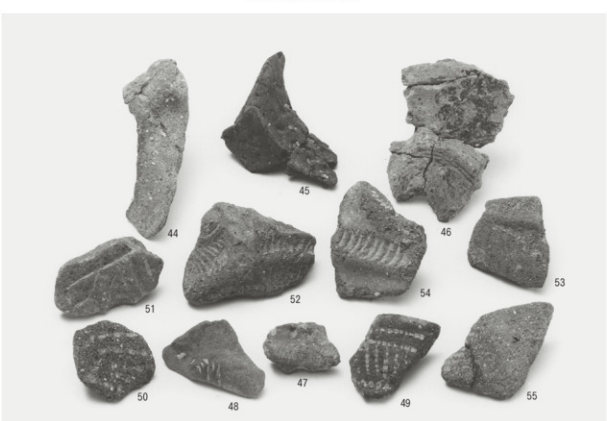
SK72出土遺物

遺構外出土土器1

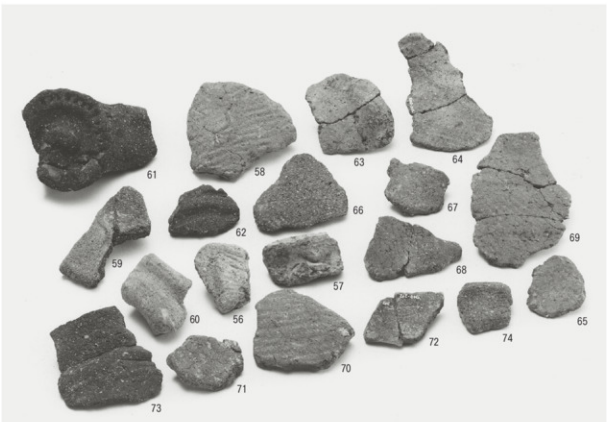
図版12



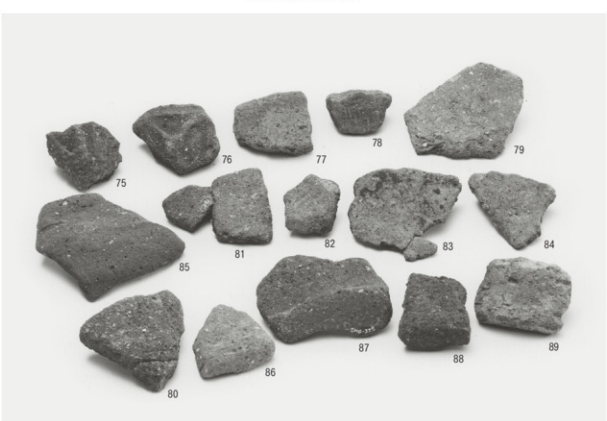
遺構外出土土器２



遺構外出土土器３



遺構外出土土器4

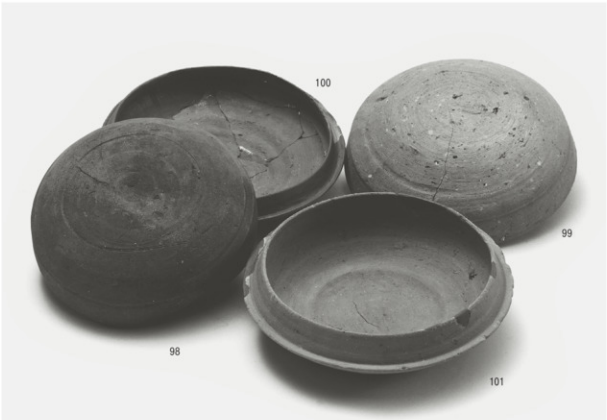


遺構外出土土器5

図版14

SD27出土遺物

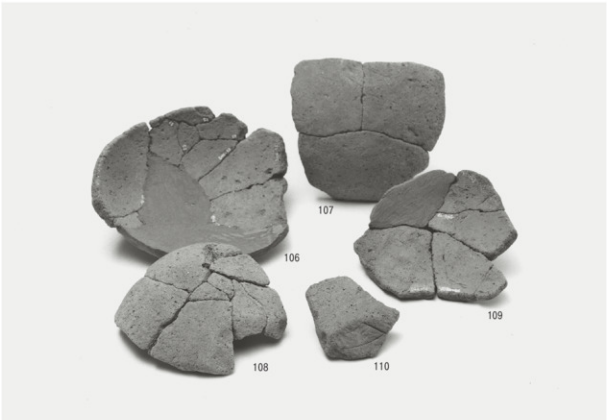
SD03出土遺物



SD02出土遺物

遺構外出土土器6

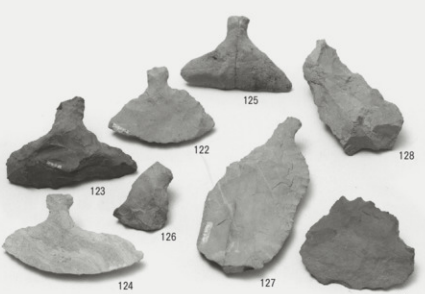
図版16



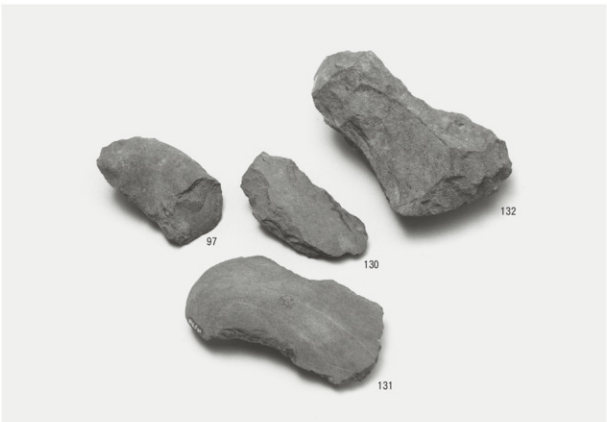
遺構外出土土器７

遺構外出土土器８

遺構外出土石器 1



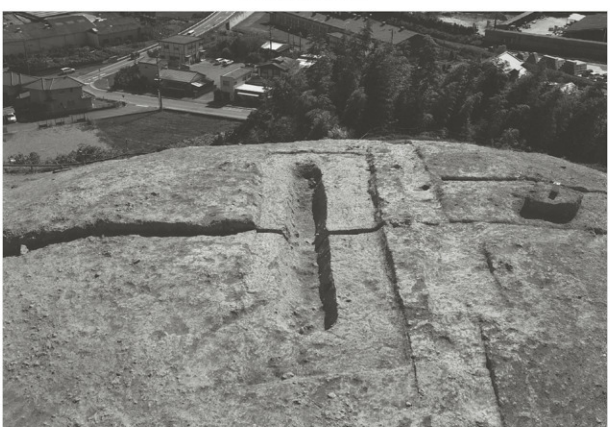
遺構外出土石器 2



SD36・遺構外出土石器３

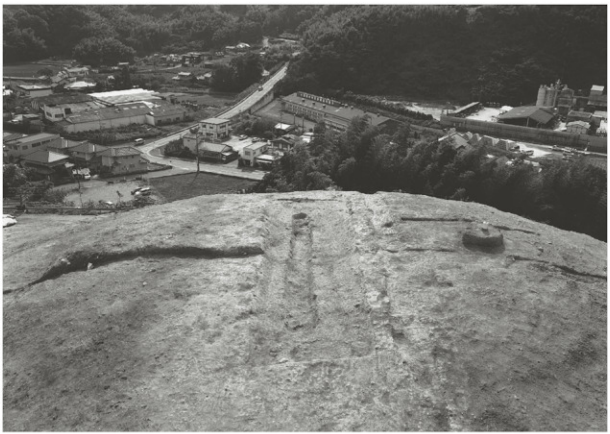
遺構外出土石器４

古墳全景（北東より）



主体部木棺完掘状況（北より）

図版20



主体部掘方完掘状況（北より）

木棺北小口裏込め礫出土状況（南より）

木棺南小口裏込め礫出土状況（北より）

古墳出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	はなぐらおおやなぎいせき・はなぐらおおやなぎこふん
書名	花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳
副書名	第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第21集
編著者名	五味奈々子
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23番20号　　TEL 054-262-4261㈹
発行年月日	2012年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
花倉大柳遺跡・ 花倉天柳古墳	藤枝市花倉字大柳	22214		34°53′47″	138°14′16″	20030611 ～ 20040116	4840	記録保存調査 （道路建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
花倉大柳遺跡	集落	縄文時代中期	竪穴住居跡・石囲炉	縄文土器・石器	
	集落・墓	弥生時代後期～古墳時代前期	竪穴住居跡・方形周溝墓・溝状遺構・土坑	土師器	
	古墳	古墳時代後期	円形周溝	須恵器	
	墓	古代以降	方形周溝状遺構・窯状遺構・土坑	灰釉陶器	
花倉大柳古墳	古墳	古墳時代前期後半～中期前半	木棺直葬墳	土師器	

要約

花倉大柳遺跡は、葉梨川中流域の丘陵上に位置する縄文時代から古代までの複合遺跡である。縄文時代中期の遺構としては、竪穴住居跡および石囲炉を検出し、北裏C式、北屋敷式などの中期前葉～中葉の土器や、石鏃・石匙・スクレイパー・打製石斧・敲石などの石器が出土している。弥生時代後期～古墳時代前期の遺構としては、竪穴住居跡と方形周溝墓を検出しており、遺構の切り合いから、集落に引き続いて墓域が形成される変遷を追うことができる。古墳時代後期の遺構としては円形周溝を検出している。周溝内から後期前葉の須恵器の蓋坏が出土しており、円墳の周溝である可能性が高い。平安時代の遺構としては方形周溝状遺構を検出し、9世紀後半の灰釉陶器が出土した。この他に、古代以降に属すると推定される窯状遺構および土坑が検出された。

花倉大柳古墳は花倉大柳遺跡の調査区南側の独立した丘陵上に単独で営まれた木棺直葬の円墳であり、埋葬施設には割竹形木棺が採用されている。木棺内からの出土遺物はなく、木棺土部と周溝内部から土師器片が出土した。埋葬施設の形態および出土遺物より、古墳時代前期後半～中期前半頃に築造されたと考えられる。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第21集

花倉大柳遺跡・花倉大柳古墳

第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成24年11月30日　発行

編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23－20
TEL　054－262－4261㈹
FAX　054－262－4266
印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055－921－1839㈹